Maria † Sacred war

蛇の目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍａｒｉａ†Ｓａｃｒｅｄ　ｗａｒ

【Ｎコード】
Ｎ５８８６Ｔ

【作者名】
蛇の目

【あらすじ】
世界の破壊と再生を繰り返してきた異世界アルファローレ。
神の気まぐれによって生まれたその世界は不安定なものだった。
記憶喪失のはずなのに、自分ではない幾多の“記憶”を持つ、異端のエルフ「サジュア」。
主人公の暗闇と記憶を中心に今、世界で混沌なる聖戦が幕を開ける――――。

※この物語は私が長い時間をかけて、ようやく文字にできたものです。

ＨＰ「ＣＨＥＳＳ†ＰＥＯＰＬＥ」でも「レイピス」として活動中。

第一部　「汝、誰が為に剣を取るか」（前書き）

「君の本当に書きたい物語は何か。」という
ふと沸いた自分の問いに答えるべく、そして「書き終える」という
目標をかなえるために精一杯がんばりますので、
よければ、このつかの間の世界をお楽しみください！

第一部　「汝、誰が為に剣を取るか」

『その時、世界は紅き聖女の破壊の焔に包まれ、浄化なされました。
絶望と暗黒に満ちた世界は無に還り、再生されるのを待ちました。
蒼き聖女は無なる世界に生命の水を懸けて、世界を作られました。
空と大地が産み出された世界は色を持ち、新たな理の欠片が芽吹きました。
最後に翡翠の聖女は審判の雷でもって、世界に叡知なる掟を作られました。
叡知を得た世界は、そこにいる全ての生き物は、知識と掟の宝を手にいれました。
かくして世界は三人の聖女によって産み出されたのです。』

――――――アルファローレ国立文献『世界再生にいたる破壊』より。

＊＊＊

薄暗い一室で、何か布の擦る音がした。次にすとん、と落ちる音と共に浮かび上がる影は起き上がる。

「……。」

影は一言も言わずに立ち上がった、冷たい大理石の床が足に染みる。眠気という怠惰な感覚が一瞬で冴えた。

ひやりとした冷たい水に濡らしたような冷たさに少しばかり身震いがする。

それでも影はその感覚が心地いいのか裸足の足を衣類で纏わせたりはしなかった。

その足で影は光が唯一射す窓に向かうと鍵をあけた。

静かに、静かに、カチリと音さえさせないようにその手つきは慎重だった。

それから、影はクローゼットから真っ黒なコートを取り出した。

それはこの気温では少し寒いと思われる生地だったが、影はそれを躊躇なく羽織る。

次に、ようやく裸足の足に靴下と、膝上まである長さのブーツを履いた。

衣類を着終わると、影は机から錠剤を取り出した。錠剤を煽るように二粒飲み込んだと同時に、声が響いた。

《大丈夫》

まるで幻のような言葉に影はその言葉に頷けば、机にあらかじめ用意していたらしい、薬がある方ではない、右側の引き出しを空けて

紙を取り出すと机に置いた。

乱雑な文面のそれは薄暗い部屋で月光だけを浴びていた。

《さぁ…》

部屋をぐるりと見てから、聞こえる声に惹かれるように、影は窓に足をかけて、

ひゅうっ…

と、風を斬る音と同時に飛び降りた。

すぐさまタンッと音が響く。

そこには再び夜の静けさが訪れた。

空に浮かぶ二つの紅と紫の月だけが、一部始終を見守っていた。

＊＊＊

「第一部隊！応答せよ！こちら第三――――。」

グシャリという音共に青年は月を見上げていた目を下に向ける。
小さく驚いた顔をして、青年は今先程踏んだ通信機を見つめた。
通信機はひしゃげた形でノイズだけを響かせて、もう使い物にはならなかった。
少し残念そうな顔を青年はする。

「僕はいつも損な役回りだ。」

そして青年は回りを見渡してから、朱に染まった銀髪を靡かせた。
紫の目は一点をみつめる。
赤い月に寄り添うように浮かぶ紫の月。
暫くしてはっとした青年は、踵を返すと、足早にその場を去った。
――――残った肉片と残骸は、翌朝、跡形もなく消えていた。血の一滴もそこには残されてはいなかった。
失った一班を率いていた騎士は唇を噛んだ。じんわりと鉄の味が広がるのに気づいたのは、話しかけられた後だった。

「騎士隊長、皇子からの伝達です…。」

（こんな時に…）

一般兵士は騎士の指すような視線に一瞬、言葉を止めた。

騎士は暫くしてから、ため息と謝罪をしてから告げた。

「すまない、続けろ」

「はい、アルファローレより南にある、セルジニア小国との国境で何か争いが起きてます。負傷者も多数いるらしく至急向かうようにとの事です。」

騎士はその言葉にすぐに頷くと、マントを翻して馬に乗った。

銀の百合とユニコーンの紋章――――ノクターン帝国の国家騎士団はアルファローレを経由して、セルジニアに向かった。

＊＊＊

騎士がついた時には、そこはもう広野と化していた。

迅速な対応が隣国のアルファローレではとられていたのか、すでに救急用のテントがあちらこちらで並んでいた。

慌ただしい雰囲気と広野となった国境に騎士は動揺しながら、丁度近くを通りかかった看護部隊に話しかけた。

「君、これはどういう事だ？」

国同士の争いでは？と聞くと看護部隊の女性は憤慨した様子で手を腰に当てた。

青く、そして長いみつあみが揺れる。

「国同士で？とんでもない！
やつらの仕業ですよー」
「やつら？」
「ええっ知らないんですかッ？！」

看護士の反応にイラっとしたものが込み上げたが、知らないのだから仕方ない。
恐らく彼女の班ではほぼ当たり前のような話題なのだ。
女性に非はないと騎士は落ち着こうと息を一つ吐いた。

「それで？やつらとは？」
「『ダーカルス』ですよ。知りませんか？
ここ数年、頻発に歪みが起きてるのは彼らのせいだって噂ですよ。
全く、どれだけの人が被害にあったか…！」

『歪み』。それはこの世界で起きる天変地異の一つだった。

あらゆる異世界に繋がるアルファローレは、存在が奇跡とも云える世界で、
すべての異世界と通じているただ一つの世界だった。

そのせいなのか、この世界では何らかの弾みでたまに空間が捻れ、時に接触が起きると多大なエネルギーが起きると同時に、本来なら『ゲート』と呼ばれる数ヶ所しか繋がらないはずの異世界同士が繋がってしまう。

これを『歪み』とアルファローレでは一般的に言われている。
被害はいつも大規模で、繋がった歪みから異世界からの住民が呑ま

れて、こちらの世界に飛び出してきたり、
それがまだ人間なら未だしも魔物だった時はそれだけで大騒ぎだ。
加えて、繋がった時のエネルギーは雷や嵐が一時的に発生するので
災害の中で最も歪みは最悪とされている。

しかし歪みはいわば時の運のような物で、人が操作できるような代
物ではないと現在の研究では言われていた。
騎士は目を丸くして看護士を見る。

「なんだと？そんなことあるわけないだろう。
歪みを起こす事ができるものなんて聞いたことがない。」
「でも、ここ最近は、確かに歪みが在るところ全てにやつらが現れ
てるんです。
これっておかしいと思いませんか？」

看護士の言葉にううむと唸る騎士だったが、考える時間はあまりな
かった。
すぐさま悲鳴が遠くで上がったのだ。

「何事だ！」
「隊長！魔物！魔物です！
しかも、見たことのない魔物で…北の３つの医療テントうち２つが
襲われました！」
騎士は部下の言葉に駆け出した。

＊＊＊

北は壮絶な事になっていた。
分類では恐らく獣型の魔物だろう。
しかしそれらの牙は恐ろしい程長く、恐らく蜂鳥の嘴よりも長かった。

加えて最悪だったのは、

「どういう事だ！人間まで襲って来ているではないか！」

一部の人間が椅子や机、武器を振り回していた事だった。
中には先ほど来る時に一緒だった兵士も敵のなかに混じっていた。

一部の看護士は魔術で対抗しているものいたが、本来魔術は遠距離戦闘故に、近距離戦の今の現状けわしいものだった。

と、背後で悲鳴じみた声が起きる。

「いやああ！娘を殺さないで！」

女性の視線の先には足に傷を負ったらしく、動けない少女が座り込んでいた。
そしてその少女に向かい、兵士は剣を振り上げた。

「やめろ！」

騎士はすぐさま駆けつけて、少女を庇うように抱きしめた。
しかし、兵士は騎士の言葉に反応することなくロングソードを降り下ろし――――

「庇うより剣を抜くべきじゃないか？騎士長さん。」
流れるような声が聞こえた刹那、ガキン！という鋼がぶつかった音が響いた。
「ッ？！誰だ！」
「俺が誰とか今それ大事じゃないだろ？」
騎士が視線を上げた先には、真紅の髪が印象的な黒い団服を纏うエルフが、
自分らを守るようにして立ち、その手にはバスタードソードが握られていた。
騎士はエルフに違和感を抱きつつも、今は少女を助ける事だけに思考を移して抱き上げる。
「助かった。礼をいう。」
「ふ、お礼より参戦してほしいね。」
エルフの言葉にそれもそうだと頷いて、騎士は先ほどまで少女を案

じていた女性に身柄を渡すと、すぐに腰のロングソードを抜いた。
「…敵の数は？」
「魔物はざっと２５。さっき１０体位俺とお前の仲間が倒したからな。
人間はわからないけどな。」
と、先ほどの兵士がエルフを襲う。
無駄な動きが目立つ兵士の剣筋をエルフは大きく跳躍して交わし、
その腹に柄を叩き込んだ。
「大人しく寝てろよ。」
「うッ！」
と、うめき声と同時にその口からなにかが出てきた。
騎士は唖然としていたが、エルフはただ珍しそうに目を見開いた。
刹那、その口から抜け出た魂のような魔物に、エルフは魔術も操れたのか炎で焼き付くしてしまった。
「わお。悪しき幽霊（アンシーリーゴースト）が犯人か。
騎士長さん。腹にぶちかましてやんな。本体を叩かないとこいつは駄目なんだ。」
やたらと魔物に詳しい、と騎士は思ったが無言で頷き、剣を交わす味方に命令した。
「人間は腹を狙え！いいか！殺すなよ！魔物は切って構わない！」
「ならその幽霊は私達が。」
いつの間に看護士班の一部の人間は患者の避難を終わらせたのかそ

れぞれがロッドを手に騎士に言った。

「なんせ、アンデットは魔術しか効きませんからね。」

＊＊＊

それから。
劣勢だった味方はたった一人のエルフの援護を得て一気に優勢に回った。
恐らく正体が分からずに戦う意識から、正体と討伐方法を理解した意識に変わったせいだろう。
皆、本来の力を出して戦う事ができた。

しかし、劣勢に回った魔物は一部恐れて逃げ出した為に完全に討伐をすることはできなかった。その故に今夜は兵士が各テントに見張りにつく事となった。

一方、悪しき幽霊に操られた人々も意識を取り戻し、腹痛を訴えるだけで命に別状はなく、一件落着に終わった。

軍のテントではエルフと騎士が飯を取っていた。
というのも、兵士や騎士を含め、多くの民がそのエルフのお陰で助かったと思うものがいたからで、
エルフ自身は力を貸した事についてはあまり意識していない様子だ

った。

「君の剣裁きは実に上手いものだな。
我が部下に見習わせたい位だ。」
「ご冗談を、今回だって上手く戦えていたと思うけど？」
「いいや、隣国アルファローレに比べたら全くもって駄目だな。
魔術より武力に力を入れているせいもあるんだろうが…。」

思い悩む騎士にクスクスとエルフは笑う。

「……どうした？」
「いいや。俺が剣を習ったのはお前の国だからさ。騎士長さん。」
「……なんだと？」
「国がどうこうとか、そんなの剣には関係ないね。要は気持ちの違いさ。」

気持ち？と首を傾げる騎士にエルフはぐいっと果実酒を飲み干してから問いかける。

「君は何故剣を持つ？」
「それは民を守るからで…」
「はは、違うな。」

エルフは深紅の瞳を此方に向けた。
一瞬、ゾクッと悪寒が騎士を襲った。
射抜くようなその目にはどこか殺気めいたものが渦巻いていた。

「人は皆、自分が死にたくないから武器をもつ。
誰かを救うなんて二の次だ。」
「だ、だが民を守るために我ら騎士団はあるのだ！」

「わかってないなぁ。」

エルフはバスタードソードを召喚した。
魔術を操れる者の中でも上級者の多くは、こうして武器を異空間から召喚する術を最初に覚える。
それだけで驚くというのに、エルフは剣を騎士に向けた。

「ッ？！」

しばらく固まる二人。
殺気めいた雰囲気だからか、あたりは静寂していて、ただ自分が喘ぐ声だけがテントを埋めた。

心臓が痛いほどに脈を打つ。

そして、騎士は思うと同時に気づいた。

（死にたくない。）

その感情が今一番に浮かんだことを。
その次に、この危険人物をどうにか民から離さないといけないという考えが沸き起こったのを。

それがわかったのか、エルフは剣を霧散させると笑って両手を上げた。
“もう何もしない”というサインに騎士はホッとした。

「わかっただろ？そんな簡単じゃないんだよ。
救う為に相手を倒せず自分が死んでも、次に狙われるのはその守りたい人間さ。

アルファローレの騎士は最初にそれを“体験”する。
騎士長が直々に寮に出向いて兵士に襲いかかるんだ。国が指導してるわけじゃなくもうあれは伝統だな。

大の大人が乱闘しながら鬼ごっこ、っていうシュールな光景なんだが、やられてる兵士はビビるな。
もう同じ部屋の仲間でも、お互いにお互いを守る余裕なんかないわけだ。

で、気づくんだよ。
まず誰かを守るためには『自分が生きていない』と駄目だってな。」

エルフの話に暫く沈黙が訪れる。

騎士は無言で酒を飲み干してから立ち上がる。
腰の剣がカチャカチャと音を立てた。

そうして一言、

「兵士の訓練を改める。」
「そう、んじゃ俺も手伝うかな。楽しそうだし。」

ニヤリと二人はお互いに笑んでからテントを飛び出した。

＊＊＊

翌日の朝。看護士は唖然としていた。
兵士は皆無言で素振りをしている。
中には練習試合さえしているのもおり、見張りの兵士は次の当番に交代してもらうと今までなら休んでいたのだが、
すぐさま練習に精をだす始末だった。

ここは軍の何かキャンプ場かとさえ思う異様な光景だったが、
どうやらその不気味さが却って功を奏したらしく魔物は一切でてこなかった。

「感想は？」
「うむ、実に楽しかった。来年の新入兵士が来るのが楽しみだな。」

エルフと騎士は手合わせを終えて少し休みながらそう話した。

昼頃、エルフは軽く食事を済ませてから国境から旅立った。

騎士や兵士は少しの時間ではあるものの、エルフから学ぶものが多かっただけに、とても名残惜しそうだった。

そんな様子に最後、エルフは笑っていった。

「なに、すぐに会えるさ。」

＊＊＊

後日。一向に出てこない魔物を仕方がないので、此方から出向き討伐した騎士達は、無事任務を終えてノクターン帝国に戻った。

しかし城は何やら慌ただしかった。

メイドが駆け巡り、執事が転び、本来ならいない間、兵士棟にて訓練をしているはずの者さえ城で走り回っていた。

騎士は手近にいた――否、転がっていた執事に問いかけた。

「君、これはどういうことだ？」

「はぁ、それが…」

困ったような表情をする執事の言葉に被るようにしてメイドの悲鳴じみた声が聞こえた。

「姫様！どうか今夜の舞踏会だけはご出席下さいまし！」

「やーだね。誰があんな悪趣味なドレス着るか！あんな布は裂いて民にあげちまえ！」

聞き覚えのある声と、黒い服。ひゅんひゅんと階段を飛ぶように走る姿に騎士は唖然とする。

「女、だったのか…？！」

「また会ったな騎士長さん！性別は認識しなくていいから、よければこいつら止めてくれないかな！」

エルフは笑いながら背後にいる、牛の群れの如く走ってくるメイドを指差した。

剣の腕のたつエルフ――――ノクターン帝国の王家にて養子という名目で保護されている
希少なエルフ人種の性別詐欺師、サジュア・ウィル・ローリアが城内でさらに有名になったのは言うまでもない。

と、その光景を一人、物陰から見ている青年がいた。

「……。」

見つけた、と青年は口元に笑みを浮かばせると、背を向けて、影に溶けるようにして消え去った。

「？！」

ぞくっと一瞬、嫌な感覚にサジュアは足を止めた。

「……。」
（今…何か視線を感じたような…）

首を傾げたあと、サジュアはひょいっと身を壁に寄せた。

勢いづいたメイドの群れがどささっと目の前で山積みになる。

「おぉ…？！」

別の意味で唖然としつつ、サジュアは振り替える。
殺気の悪寒はいつの間にか消えており、サジュアは再び首を傾げる。
一方ではターゲットを確認した青年は、満ち足りた様子で道を歩む。
「見つけた。やっと…
１０年探して来た甲斐があった…。」
そして世界は今、新たな物語を生みだそうとしていた……。

第一部　「汝、誰が為に剣を取るか」（後書き）

はじめまして。「Ｍａｒｉａ†Ｓａｃｒｅｄ　ｗａｒ」作者の「蛇の目」といいます。
実はこの作品の最初の原稿は小学五年生の小さな自由帳に書いたお話から生まれたものでした。
昔からお話を書くのが好きだった私は、多々の物語を途中で放棄していましたが、
この物語だけは、形が変わっても、ずっと心に残っていた物語でした。

途中で物語に迷って何度も何度もあちこちのＨＰで作っては消しのくりかえしでしたが、
今日から私はこの物語を最後まで書くと決めました。

みなさま、どうか最後までおつきあいください・・・・！

第二部　「そして匙は投げられた。」

周りは美しい花畑。
けして同じ色ばかりでない花の色だったが、それは不快感を全く与えない、調和(コスモス)した世界。

人はそれをただ、綺麗だという。

「……。」

少女は花に手を伸ばした。

しかし、花に触れる直前、

「おーい！××××！」

ふと誰かに呼ばれた気がして、少女は立ち上がった。

しかし駆け出そうとした足は動かない。

「…え？」

そして、沢山の色彩は、
視界の中で入り交じり、混沌(カオス)に変わって。

暗黒はただ、少女を飲み込んでいき、少女は声もなく涙を浮かべた。

（――――――嫌！！！）

徐々に迫り来る混沌から逃れるように手を伸ばした。

助けて、誰か、誰か！

「×××××ッ！！」

ふと先ほど聞こえた声が下から聞こえた。

「さあ、おいでファルシア！」

「……っ！！！」

どこか知っている気がする、手を広げた少年が、真っ赤な姿でとファルシアと呼ばれた少女に手を差しのべた。

＊＊＊

ジリリリリリン！

けたたましいベルの音に、それはハッとした。

（そうだ、早く書類終わらせないといけないんだった。）

手に持っていた羽ペンは幸いインクをつける前だったので、書類に被害はまったくなく、青年は安堵のため息をつく。

国家予算や新しい領主ができた報告などが記載されたそれを机で角を合わせながら、いつの間にに眠っていたのだろう？と思案するも、答えが見つからないので青年はため息混じりにあきらめた。

と、そこへ再びベルが鳴った。

ジリリリリリン！

アイスグレーの瞳は暫くそれを気づかないふりをしようと眺めていたが、三回目のベルに負けて、ボタンを押した。

ウォォンという機械音とともに、エレベーターに似た、魔科学によって電気ではなく、魔力でもって上がる箱が青年の部屋の階に止まった。

「来たね。要件は？」

「仕事のお時間に申し訳ありません。しかし、緊急事態なのです。
……“歪み”が発生しました。」

その言葉に青年は立ち上がる。
最近は歪みが多い。
ノクターンの各地でも時として甚大な影響を受ける。

青年―――ノクターン時期帝王、ミランは指を鳴らした。
刹那、誰かが引っ張りだすように棚から地図がふっ飛んできて、机に広げられる。

「場所は？」
「はっ、我らがノクターンが統治するメルトです。」
「メルト…また随分人のすむ場所に…」

と、言葉を濁す兵士に気づいて、ミランはどうかしたかい？と聞いた。

「あの…」
「なにか？」
「あの…ミラン様」
「……大丈夫、
父上と違って私は君のせいにして怒ったりはしないよ。
ほら、言って」
「…あの、昨日からサジュア様がお見えになりませんが…」

ミランはその言葉にようやく、面白そうに笑みを漏らした。

（また逃げたのかあの子。）

と内心呟きながら、どこに行ったかは想像がついたので

「ああ、彼女なら多分昨日異世界管理騎士団(在るべき場所)に戻ったよ。」

と返す。

「そう…ですか…」

おそらくサジュア目的の人間が来たのだろうと予測しながら、

――――その相手が誰なのかもミランはわかりながら

ああ、適当にいっておいてくれ。と言っておいた。

なんとなく、しょんぼりと項垂れる兵士に罪悪感が沸いて

ミランはこれあげるよ。と近くにあったアンティーク調の時計を渡した。

兵士はまず驚いてから頭を下げてエレベーターに戻る。

暫くして下から『ひゃっほう！皇子から頂いた！』と小躍りする声が聞こえてきてから、

下の階に着いたらしく咳払いの音が響いてから立ち去る靴音がした。

（聞こえてる。聞こえてるからね、君。）

と小さくミランは笑ってから、自分の我が儘で、半場強引に義理の妹にしたエルフを思い出して呟いた。

「君、本当に彼が苦手なんだね。」

暫くして、高貴そうな金髪の青年が入室してくればミランは苦笑し、
やれやれと立ち上がった。

一方。城から逃げ出すようにしてサジュアは、
自分が所属する騎士団に行くために、至急に用意させた馬車に乗って文字通りぐったりとしていた。

「大丈夫ですか？ご主人様。」「元気出してくださいよ。」
「あいつ…不意討ちで来るなんて卑怯だ…」

馬車に同じく乗っている二名の少年少女は成り行きでサジュアの従者となった事情を抱える者たちだった。

サジュアは一人、どうしても苦手な人間がいた。
その人間から逃げるようにしてノクターン城を出たサジュアは、
馬車で何故だかいつも異常に疲れたとため息する。

「俺、ノクターン城帰るのやめようかな…」

二人はきょとん顔を見合わせてから、あわてて主を励まそうとしていた。

＊＊＊

ノクターンとアルファローレの間には、国境に無理矢理紡円(レモン)体を埋め込んだような小さな国があった。

都市国家ヴァルネシリアと呼ばれるそれは、
文字通り一つの都市が国に変わったという、極めて珍しい過程に置いて生まれた国だった。

さらに、この都市国家の特徴として
国全体が一つの“騎士団”なのであった。

「相変わらず、すごいな警備。」

サジュアは何度も見ているはずなのにも関わらず、
張り積めたような空気のある外壁に、馬車で少しずつ近づきながら
目に入った大砲や監視兵の数にそう呟いた。

ようやく馬車が国境という城壁にたどり着くと、

サジュアはそこから降りて、軍隊の証であるピンバッジを見せると、兵士は道を開けた。

これ《バッジ》がないと、交友関係である国の王家の馬車ですらいれてもらえない。

サジュアが乗ると、馬車は進み、その背後で

ガシャン！！

と、重い鉄格子の扉がしまった。

ヴァルネシリア。

歪みによる公害や異世界同士の争いなど、世界単位を守り、戦う騎士団の本部であるこの国は
王政ではなくとも、その異常な程に団結された民によってこうも呼ばれた。

「『混沌（ヴァイオレット・キングダム）に隔離されし国』、か。
俺もよくこんな所好いてるよな…」

まぁいいけど。とサジュアは肩をすくめたと同時に、馬車の動きが止まった。

＊＊＊

ぴくん、とその眠っていた魔物は闇の中でで反応をした。

何かが、来る。

魔物は遠い光の穴に向かって飛び出した。

＊＊＊

チリィィ――――ン。

エルフはふと音が聞こえたと同時に馬車の扉を蹴り開けた。
すぐさまサジュアは従者二人を連れて飛び出した刹那、馬車は微塵に砕け散る。
“守れなかった（運がなかった）”御者は馬車や馬と共に肉片へと化してその場を真っ赤に染め上げた。

あたりはシン、と静かになった。

国境の城壁を越えたとは云え、まだ石畳だけしか開拓されていないこの土地だったが、
今はお昼休み。開拓する人影がない今、その静けさは不気味な程だった。

サジュアが片手を広げると、魔力によって現れたバスタードソードを握る。

「白亜、赤亜。人を寄せないようにして。」

「了解（イエス・マスター）しました」

刹那、背後にいた二人の従者の気配が消える。

ゴッ、……カラン。

鉄の落ちる音がして、ターゲットを狙い損ねた敵が瓦礫からむくりと体を上げた。

「……何の為に馬車を狙った？」

サジュアの問いかけに、それ(殺人者)は答えた。

「輝く宝(キミ)があまりに欲しいと宣教師(マスター)様が言うから、宝箱(馬車)を壊しちまった。」

くくくっと不気味な笑い声と同時に、茶髪の男は両手に握ったサーベルを持ち、サジュアに向かって走り出した。

「大人しく捕(死ね)まれ！！」

第三部　「紫の記憶。」

今日は最悪な日だと思った。

朝は妙な夢をみて起きるし、
頭痛だってジンジン響く。
大嫌いなあいつは突然やってくるし、
変な奴に絡まれた。

最悪だ、とサジュアは呟いたが、それに相反して表情は笑っていた。

（なのに…どうしてこうも楽しいんだろうな？）

サーベル男の刃をサジュアは簡単に交わすと、バスタードソードを消した。

殺さなきゃ、殺される。

サジュアは目を閉じて感覚を研ぎ澄ませる。

「おいおい、終わりか？諦めたのかよ？」

男の煩い声が聞こえた。サジュアはそれを無視して、目を開けた。
そして、微笑る。

「取るに足らない馬鹿を、俺が相手にするつもりはないね。」
そして、地を踏んだ。

「おい、いつまで寝てるつもりだ？夢魔（ナイトメア）。
でてこいよ！」

刹那。サジュアの足元からぼんやりと辺りを黒い霧が覆う。
それは瞬く間に具現化すると、影から出てきた魔物はその言葉に苦笑した。

《酷いなぁ、いいって言うまで出てくるなっていったのは
君でしょうサジュアぁ？》

魔物は青年の姿で現れると、既にその手には影で作られたトライデントを握っていた。

「いつも守らないくせに」
《今回は守ってたのー。》

エルフの呟きに返事をしてすぐに、ナイトメアは滑るように駆け出した。

サーベル男はサーベルを構え直して同じく駆け出した。

＊＊＊

何度も何度も振り上げられたサーベルは、夢魔に届く前にいつも避けられた。
やがて、自棄になって凪ぎ払うようにしたサーベルを、ナイトメアは突いたトライデントの三又に捕らえた。

「なっ…」
《愚の骨頂、だね。》

ニヤリと笑ったナイトメアはそのままトライデントを斜めに回す。

ギリギリという音がした。

男は慌ててサーベルを引こうとしたが、遅かった。

ピシッ…バリン！という破壊音が剣から奏でられ、刃はクルクルと回って地に刺さった。

武器を壊された男はとたんに、ひぃっと悲鳴をあげて後ろに下がる。

下がって、笑った。

「…くくく…はは！ははははっ！」

「……頭イカレてんじゃねぇ？お前なんかした？」
《まだしてないよ？》

まだと言うことはしようとしていたのか、と突っ込みつつ、サジュアは首を傾げる。

男はユラリと仰け反ってから、何かを煽り飲んだ。

「…！！ばっ…それは…！」

薬を躊躇なく飲んだ男は、ニヤリ、と笑ってから自らを守るように身体を抱いた。

サジュアはドン引きした表情で相手を見つめた。

「…ユリアの根の汁…」

身体を強化させるユリアの根だったが、
それを原液で飲めば身体は無理矢理構造を歪ませて強くなり、そして暫しの強さの後は

（――――死、だ。）

＊＊＊＊＊

男の身体はその間にも変わっていった。
骨がひしゃげる音がして、骨格が歪み、
筋肉が盛り上がり、同時に血管が浮き出てきた。

爪は鋭利になり、
目は充血した。

ナイトメアは人が魔物に変わる様を面白そうにみていた。

「…ぐ、…ご…ゴロ…殺…ス…」

「……そんなに俺を殺したいのか。」

サジュアはため息をした。

仕方ない。と呟いて、バスタードソードを出した。

――――ならば

「……相手してやるよ！」

サジュアが剣を構えた瞬間。

「がぁあぁっ！」
「？！」

魔物は目の前で一刀両断された。
もちろんサジュアはまだなにもしていない。
ナイトメアもこれは予想外だったらしく、口をへの字にして固まっていた。

「…全く…本当に…損な役目…」

どさっと裂けた魔物男の死骸が転がった。
その背後には、返り血を浴びたエルフが立っていた。
銀の髪は血に濡れていたが、美しかった。

しかし、サジュアが固まったのはそのせいではなかった。

「……紫、の……目…。」

目を見開いて驚くサジュアに、今気づいたらしい青年はサジュアを見て明らかに息を飲んだ

「あ……」

＊＊＊

―――ファルシア、おいで！
その青年は、少女に微笑む。
―――やめろ！その子を…
その青年は、少女を守った。
―――君、まだここにいたのか…
その青年は、少女を突き放す。
ドッとそんな情景が、サジュアになだれ込んだ。
（何故…なんで…これ…記憶…？）
無意識に目は、その知らない紫の瞳を宿す青年に釘告げになった。
―――駄目だよ、君は剣を…
敵だらけの景色の中で青年は止める。
―――その子を殺すな！
剣を抜かなかった少女に襲い掛かる敵。
―――ファルシア…君を…
目の前で敵を殺した手で、濡れた手で青年は少女を……。
（やめろ…もう、これ以上、みたく…ない）
サジュアは心の中で“命令”した

もう、なにも…

「目覚めさせるな…！」

＊＊＊

キィィィ――――――ン！！！

突如、耳鳴りに似た何かがサジュアを襲った。

頭痛が激しさを増す。

クラリと立ちくらみがして、そんなサジュアをナイトメアが支えた。

《サジュア！！》

「い…った…何だ、これ…」

バスタードソードがカラランと石畳に転がる。

頭痛が激しさを増す。

しかし見知らぬ記憶はもう流れ込まなかった。

（ちっ…なんだよ、これ…）

ゼイゼイと喘ぐサジュアを見て、そのエルフは笑う。

「！？」

「…そう…サジュアと呼ばれてるのか…

……また会おうねサジュア…楽しみにしてる…」

そうサジュアに微笑んだエルフは、小さく死骸、回収完了と呟いてそのまま、死骸と共に消え去った。

《……サジュア大丈夫？》

「なんなんだ…アイツは」

エルフが消え去ると同時に消えた頭痛に、サジュアは心底不快な気分だった。

知らない相手なのにも関わらず、相手は知っていたような口調。

そして、どうしようもなく惹かれた紫の目。

何より自分が馬鹿みたいにそれを見つめていた事実が腹立たしい。

「…くそ…。」

いつからこんなに女々しくなったんだ、とサジュアは自身に嫌気がさして、バスタードソードを消した。

「それにあいつ…夢で見た奴じゃないか…」

サジュアの呟きに、愛しそうに魔物はサジュアを背後から抱き締めた。

《大丈夫…サジュア…君を傷つけるもの…不快にさせるもの…全て悪夢に落としてあげるから…》

「……ああ。」

返事を返すと同時に、辺りに、何か鈍い音が響いた。

「……だからと言って、誰がいつどこで、俺に抱きついていいと？！」

《なんだよーいいとこだったのにぃ》

「ふっざけんな！この変態！！」

ぶーぶーと背負い投げされたナイトメアは愚痴るが、サジュアは当たり前だ！と答えた。

「絶対抱きつくなよ！今度したら絶好だからな！！」

《えー恋人なら抱きつくのは当然じゃないかー》

「はぁあっ？！恋人？誰が？

ふざけんな。今すぐ死ね！」

完全にナイトメアに遊ばれているサジュアはそれに気づくことなく、暫くふよふよと浮かんで逃げる夢魔を追いかけ回した。

そして

《…恋人じゃないの？》

疲れきって座り込んだサジュアをナイトメアはよしよしと撫でながらそう聞くと、

「保護者だ！！」

断固として言い切った。

第四部　「赤の少女は青に行く」

異世界管理騎士団本部（ヴァルネシリア）はいつにも増してピリピリとした雰囲気にあった。

サジュアが歩む道だけでも、お互いに睨み合う輩がおり、気分を害した気分にこちらまでなった。

…まぁその心中を察したらしいナイトメアが、仲間をぼこぼこにしようとするのを止めるのに途中から。気分を害したわけだが。

「お帰り。」

少し高い声がサジュアの背後から聞こえた。

振り替えれば、金の目をもつ青年がダーツの矢を弄んで立っていた。

「よっ」

「相変わらず変な格好だなーステイル。

パーカーに普通のズボンってどうなんだよ。」

自分とは違う部族であるヒューマンの文化はことごとく不思議だ、と首を傾げるサジュアに、ステイルと呼ばれた青年はむっとする。

「終始軍服のお前に言われたかねぇよ」

「だって俺はこれしか見たことねぇもん」

「ドレｓ「あんな服でどう戦うか教えてくれたら考えてやるよステイル。」

ジャキンとバスタードソードを黒いオーラを放つ笑みでサジュアが持ち出すのを見れば、ステイルは逃げ出した。

《もう恒例になってるけどね》

「なのにあの全速力なんだから凄いよな。」

クスクス笑う保護者の言葉に、サジュアはため息した。

「あれじゃあ、いつまでたっても幹部にはなれねぇよなぁ。」

＊＊＊

逃げてしまったステイルを探すのも面倒なので、サジュアはとりあえず自室に戻って調査報告書を書くことにした。

本部の三階と宿舎塔の七階は空間移動（ワープ）魔方陣によって繋がっており、サジュアはそこから行き来をよくしていた。

と、言うのもサジュア自身の自室が七階にあるからだった。

だからうまくいけば本部になど5秒で行けるわけだが、早々はうまくいかない。

「お前がどけよ！」

「はぁ？ミーナランクに言われたかねぇよ！」
「なんだとこのチビ！」

ヴァルネシリアには騎士の強さを表すランクが定められており、それはバッジを象って人目でわかるものだった。

低級ランクの妖精獣（サザンカ）、水竜（ミーナ）、火鳥（カリア）から始まり、
中級ランク天使（パシラス）、銅十字架（フィラセル）。
そして上級ランクの銀十字架（デュオデセル）、金十字架（シーラドセル）。
そして、幹部級を表す最高ランク白銀十字架（フェラントラセル）。

また、このバッジはヴァルネシリア滞在の許可証とでもある為に、外さないワケにはいかないのである。
当然これらはランクの為に、給料などの優遇不遇が多少あるが、このような順番をランクで優遇不遇なんて例は見たことがない。

「お前だってたかがカリアじゃないか！」
「んだとぉ…」

ついに武器まで出してしまった二人の少年達だったが、処罰を受けるのは自分ではないと、サジュアは無視して通り過ぎようとした、その時だった。

「こらこら、何してんの。」

と、ステイルが二人の間に割って入った。

「なんだお前」
「ば、馬鹿！ラーク先輩だよ！」

不機嫌そうに言うミーナの少年をたしなめるようにカリアの少年は注意した。

「奇術使い（トリックマスター）ステイル＝ラークって知らねぇのか？！」

「あっ、え？え？マジでこの人？！」

トリックマスターってなんだその二つ名、と影でクスクス笑うサジュアだったが、ステイルは気にした様子もなく少年達に微笑む。

「そんなことより、ランクの差で仲違いなんてつまらないじゃないか。いつパーティーになるかわからないんだ。皆仲良くな！」

「……。」

「…はぁい。」

渋々頷く二人によし！と笑うとステイルは此方を指差した。

「ほら、君達の騒動で困っている人もいるんだからさ。ね、サジュア？」

「俺まで巻き添えか？！」

先ほど仕返しなのかは解らないが、少年はサジュアをみて余計その顔が蒼白になった。

「ふ…フェラントラセルだっ！」

「俺初めてみた！！」

最高ランクであるフェラントラセルは数にして８人。約１０００人が所属している中で８人なのだから、確かに見る事はあまりないだろう。

しかし、少しばかり複雑な気持ちと、一瞬のフラッシュバックにサジュアは曖昧な表情をする。

「サジュア？」

「…なんでもない。お前達、先譲ってもらっていいか？今から調査報告書書かなきゃいけないんだ。」

「は、はい！」

「どうぞ自由に使って下さい幹部！！」

いや自由も何も元々空間移動魔方陣は使用自由だろうよ、と内心呟くも、それは言葉になる事なくサジュアはワープした。

＊＊＊

調査報告書と言っても、被害報告と処置報告、結果報告の３つだけなので、すぐに終わる。

羽ペンを置くと、サジュアは引き出しからカプセルを取り出した。

それを一気に五つ飲み干すと、倒れ込むようにベッドに倒れた。

ジィン…と身体に薬が溶けるのが解る。

「…ただ即効性は…最初が気持ち悪い…」
《じゃあ飲まなきゃいいのに。性転換薬(クスリ)なんて。》
「…うるさい…」

サジュアの日課として、この薬は欠かせないものだった。
このエルフにとって、自分が『女』である事実が、
どうしてなのかは本人にもさっぱりわからないのだが、許せないものだったからだ。

サジュアは魔術や剣だけでなく、薬にも精通しており、
この薬も独自開発―（というより、おそらく彼女ぐらいしかそんなことはしない）の薬だった。
副作用を極限に抑えたつもりだったのだか、気持ち悪さと疲労感に負けて、
そのままぐったりとサジュアは眠りについた。

＊＊＊

眠りはすぐに醒めた。
というのも、ノック音が聞こえたからである。

「…どうぞ。」

声と同時に入ってきた5人程の男らはサジュアを囲んだ。
何事、と遅れて起きたらしい影から眼を擦るナイトメアが現れた。

「任務だ。早く来い」
「今すぐ」
「早く、ハヤク」
「レベルは低いが。」
「重要な依頼ダ。」

「「「ワカッタラ早く来なさい“鮮血の―――」」」

「わかったって。はやく出てけ。
お望み通り血……いや、油まみれにするぞ『機械人間(お前)』達。」

すると、機械の音が暫くして五つのそれらは爆発した。

もくもくとした煙があがる程度の爆発だったが、ナイトメアは気を聞かせて高い場所の窓までを開けてくれた。

「…けほ…なんなんだ…全く…」
《失礼な奴等だよぉ！サジュアの事をあんな―――》
「まぁ…間違ってはないからな」

（俺の手は汚れている。）

そうしてサジュアは眼を閉じた。

“鮮血(マリア)の少女”。これはサジュアが『覚えている範囲』の、幼少時

代の呼び名だった。

「…最初が研究所爆発の記憶だしな…」

ため息混じりに呟いてから、血に濡れたような紅い眼を開けて、サジュアは扉を開けて部屋を出た。

ナイトメアは複雑そうに留守番をする。

《あんまりだよ…だって、君は……》

（実験材料（モルモット）にされてただけなんだから…）

＊＊＊

「異変？」

サジュアの言葉に、小人妖精族（ホビット）の依頼人は頷いた。

「おいらの町でさ、作物が急に枯れ始めたんだよぉ。

気温や水質だって変わってねぇのに、林檎や蜜柑がぜぇんぶ真っ青

になっちまったんだぁ。」
「真っ青とか、食べたくないなぁー」
呑気に隣のスティルは笑う。たしなめるようにその足を踏んだ、サジュアはそれで？と話を進める。
「何が原因なのか調べて欲しいと？」
「ん。今までぜぇんぶ調べたんだけんどよぉ、ちっど変でな。」
被害を受ける作物は、果実だけ。それ以外は何も被害がなく、同じ水や土を使っている穀物も順調に育っているのだという。
なるほど、確かにおかしい。とようやく真面目になったのかスティルは頷いた。
「それが歪みの影響だと思うんですね？」
「んだ。頼む、おいらたちの可愛い作物が変な病気さかかるんは、家族がおっちぬほど悲しいんだぁ。」
「わかりました。それなら、」
俺達に任せて下さい。とサジュアは依頼人に微笑んだ。

第五部　「星の少女は鴉を告発する」　（上）

周りは真っ赤だった。

真っ白だった筈の壁も、

もう黒く塗りつぶされていた。

「……。」

ガシャンと歩む度に

骨の折れる音が足下で鳴る。

少女がふと向けた視線の先にいたのは――――。

＊＊＊

「こんな酷い村見たことねぇよ…」

ステイルはグスグスと泣き出しそうな声で体操座りをしていた。

周りはのどかな村――ではなく、

彼がいるのは薄暗い牢屋だった。

別に彼がなにかしたわけではない。

そもそもここの村に初めて来たのがつい三時間前なのに、何かできる訳もない。

ステイルがこうして捕まっている理由…それはつい、二時間前だった。

＊＊＊

「やっとついたー」

大きく伸びをするステイルの横で、サジュアの従者である白亜と赤亜がせっせと馬車から荷物を出していた。

「やっとも何も移動時間五時間程度だろうが。」

「いや、あの五時間って長くね？」

そんな当たり前みたいな顔しないで、とステイルはちょっと傷ついた表情をした。

（…俺が幼いみたいじゃないか？！）

《ステイルはじっとするの苦手だからねぇ～》

「だって…狭いし。」

「寝てればいい話だろ？」

「お前みたいに樹の上で寝られるような奴じゃないんだよ俺は！」

あっそ。と興味なさげに馬車を降りたサジュアは深呼吸をした。

空気は街のそれより木々の息づいた味がする気がして、サジュアはにっこりと笑った。

（…いい村だ。）

自然と上手に共存している村や街ではこんな味がする、

とサジュアは仕事を終わらせたらしい赤亜を撫でながら、そう呟いた。

「さ、仕事だ。」

「うう…」

意気揚々と進むサジュアに対して、その後ろですごすご続くステイルは、被害のあるらしい果樹園に向かった。

果樹園はすぐ近くに設営されており、探す間もなく、すぐに見つける事ができた。

「わぁ」

「……。」

果樹園といっても、森に溶け込むようにして立っているそれに入る手前、二人は足をすくませた。

《青だー》

「真っ青ですね！」

「すごーい…ペンキで塗ったみたいです…」

ナイトメアや赤亜、白亜の呟いたにサジュアはこっくりと頷いて入った。

想像を絶する風景だった。

さくらんぼや林檎が木々に重そうに実っていた。恐らく収穫されていないのだろう。それらは熟成された果実特有の甘い匂いを発していた。

しかし、それら全て真っ青だったのだ。しかも鮮やかな毒々しい程綺麗な青色。

「そりゃ泣くわな。」

依頼人のホビットを思い出しながらうんうんとステイルは頷いた。

「本当にスゴいな…」

サジュアは林檎を一つもぎ取れば、服で皮を擦る。

…しかし青色は取れるわけもなく、とりあえず上から塗ったわけではなさそうだと頷く。

それから鼻のいい赤亜と白亜に匂いを嗅がせてみて、特な異常がないのを見れば、首をかしげた。

どうやら本当に青いだけらしい。

「…塗料の疑いはなし。…匂いも悪くない。…ただ青いだけ。」

ステイルはサジュアの言う言葉にメモ書きしながらついてきた。

「…あ、待った。」

サジュアは『ただ青いだけ』の言葉を書こうとしたステイルを制止させた。

匂いのない毒なんていくらでもある。植物の組織と毒を混ぜた結果、科学反応で青くなったという可能性があるのを忘れていた。

しばらくどうした物かと悩んでから、サジュアは林檎にかぶりついた。

「?！ちょ、何し…」
《サジュア?！》
ぎょっとするステイルやナイトメアの前で咀嚼するサジュアは首を傾げた。
「……。」
《こら！食べちゃ駄目！ぺっしなさい！》
俺は何歳のガキだよ、とサジュアはナイトメアを軽く叩くと、飲み込んだ。
「…ん、毒もないな。ステイル、やっぱりこれ青いだけだ。」
「いや入ってたらどうすんだよお前…」
命懸けで調査などあまりしてほしくないとため息するステイルはとりあえずメモに書き込んだ。
「他に手段あるだろ?！」
「じゃあ君が食べるのか?」
「いやだから…」
違う、と言おうとしたステイルの頭に何かが投げられて当たった。
「痛っ…な、なんだ?！」
振り返り、足元を見れば石があった。痛さに涙目になりながらステイルは投げた犯人らしい少女を見た。
そばかすのある、茶色の髪を一つの三つ網をしている少女は、謝る

つもりがないのか仁王立ちしていた。

「…あんたでしょ！」

何が？！と言うステイルに、少女は指をつきだした。ホビット族らしい少女は、背丈も小さく、ホビット族の年齢としてもまだ１０歳ほどだと言うのに何故か威圧感のあるそれに１８歳の青年はびくりとする。

「あんたが青くした犯人でしょ！あたしみたんだから！黒髪の人間が魔法かける姿！」

＊＊＊

こうして少女の告発で果実を青くした犯人とされたステイルは村の男に捕まった。違う、とステイルは主張したのだが、村人は自分の村に住む人間の言葉を信じるらしく、聞き耳もたずといった様子だった。

ホビット族の村の恐ろしさをステイルは初めて思い知った。

小さくても働き者なホビット族は団結力が強く、仲間を疑う事はしない。それ故に戦争時は人質を取られて負ける歴史があるも、人質を取るまでがとてつもなく強い一面があるのも有名だった。

ステイルは呻くようにして自分ではない黒髪の男を呪った。

（ヴァルネシリアの騎士が冤罪とか…情けないにも程があるッ！）

もちろん、ステイルはヒューマン族であって、
マジスティラ族という魔力をもつヒューマンの分岐した一族ではないので魔術や魔法は使えない。

ため息まじりにステイルはホビット族サイズのベッド――流石に小さくて寝転がれない――をイスがわりに使った。

「サジュア…助けてくれねぇかなぁ…」

他力本願と誰に言われようとも、今は本気でサジュアに希望をもつステイルだった。

＊＊＊

一方。ついてすぐに目の前で捕まってしまったステイルを呆然と眺めていたサジュアは居酒屋にいた。

『ホビット族の作る果実酒は美味い』という耳寄り情報を聞いた為だ。…もちろんそれ目当てで依頼を受けたわけではない。断じて違う。

しかしステイルの居なくなってしまった今、特にする事がなくなってしまって、

サジュアは銀貨をウェイトレスに渡して、果実酒を頼みながら何をしようかを考えていた。

「御主人様、ステイル様を助けなくてよろしいのですか？」

赤亜はずっと気になっていた質問をした。パーティーだからこそ、すぐにでも助けなくてはいけないのではないかと考えていたからだ。

白亜は『その作戦を考えるためにここに来たんだよ！きっと！』と赤亜に言ったが、どうも自分の主人はその件について、あまり真剣ではない気がしていた。

サジュアは運ばれてきた果実酒を注ぎながらけろりとした顔で「え？」と言った。

「なんで助けなきゃいけないんだ？」

「「……え？」」

赤亜と白亜は二人してポカーンとした。
ナイトメアも杯を受けとればサジュアから果実酒を分けてもらった。
「え？え？…ステイル様とご友人じゃないんですか？」
「まぁ。そうだけど。」
白亜の問いに特に焦るわけでもなく言うサジュアに従者一同は改めてポカーンとする。
（…パーティーだから助けなきゃいけない、わけではないのかな…？）
サジュアはそんな二人を見てクスクス笑いながら酒を持つ。
「…だって、ほら、仲間と思われて俺まで捕まるの嫌だし？」
「そこなんですか？！」
赤亜のツッコミに、それに。と付け足すようにさてサジュアは笑顔で
「それに…見ていた方が面白いそうじゃないか。」
と言った。
ついに黙ってしまった従者にケラケラ笑うナイトメアと乾杯するとサジュアはグラスを傾けた。
口一杯に広がるフルーティで上品な風味に思わず頬が緩む。
と、そこへ聞き覚えのある声がした。

「お金ちゃんと払って！」
「おいおい嬢ちゃん、そんな物騒なこと言うもんじゃねぇよー？」

見ればステイルを告発したあの少女が、見上げる程大きい男達にむかってレシートをつきだしていた。

周りはなんだなんだ？とそちらを向く。サジュアは興味がなくなったのか果実酒をまた飲んだ。

「お金！これ金貨じゃないでしょ？誤魔化さないでよ！」
「おいおい、当て付けはやめろって。」
「大体お前みたいなガキにお金の違いがわかんのかよぉ？」
「乳臭いガキはひっこんでろって…なんなら夜の相手してもらおうか？一足早く女の仲間入りってな。」
「馬っ鹿やめとけよー」

ゲラゲラと品なく笑う四人の男の言葉に少女は顔を真っ赤して怒鳴る。

「泥棒！意地汚い蝿め！払ってって言ってるでしょ！！」

「こいつ、言いやがったな。ガキだと思って見逃してやってたのによぉ！！」

いいぞ！やれやれ！と騒ぎ出す店内。仕事仲間であろうウェイトレスだけでなく、居酒屋の主人である中年男性はそちらに目もくれなかった。

「お前の働き手じゃないのか？」
「孤児なんだよアイツは。種族だってホビット族とはいっても、この村に捨てられただけの身元がわかんねぇからな。やることはやるが、
口煩いガキだし、いなくなった方が俺としてはせいせいするな。」
客の問いにそう答えた主人の言葉にふうん、と客は言った。
ホビット族は確かに団結力は強い。しかし、それはあくまでも村や団体単位。出身や身元がわからない輩には同族であってもとことん冷たいという噂はどうやら本当らしい。
「てめぇのせいで気分悪くなっちまった。」
「弁償してくれんだよなぁ？」
胸ぐらを掴む男達を少女はキッと睨み付ける。
「んだよ、その目はよぉ！」
手を振りかざす男の拳が、止まった。
「ストップ。」
その男の手首を掴むのは、仕方ないといった表情のサジュアだった。

＊＊＊

あたしは生まれてすぐに捨てられた。

なんでだかはわからないけど、きっとあたしが嫌いだったからだ。

あたしは朝、居酒屋の叔父さんに見つけてもらった。

けれどそれは嫌々といった表情で、けしてあたしを愛してた訳じゃなかった。

あたしはお父さんとお母さんを知らない。

ただ、お母さんは綺麗な金髪だったのだけは覚えてる。

あたしに名前を与えて、すぐに二人はいなくなった。

あたしが生まれた時から持っているのは『ステラ(星)』と言う名前だけ。

名前なんか欲しくなかった。

命なんか惜しくなかった。

「んだよ、その目はよぉ！」

殴られる。

これで頭をぶつけて、死ねたらいいのに。

あたしは目を閉じた。

来たる死を待つために。

けれど、衝撃はこなかった。

「ストップ。」

その言葉と同時に見えた人は見覚えがあった。

（あの人と一緒にいた人だ…）

胸ぐらを離された少女は、そのままずるずると座り込んだ。

＊＊＊

なんでこんな面倒なことを自分はしているのだろう、とサジュアはため息をした。

むしろ見ていた方が楽なのに。

（…。ああ。）

そうか、とサジュアは一人納得した。

孤児という言葉に惹かれたのだ。自分は。

サジュア自身、歪みに飲まれて出身がわからないエルフだ。

自分は運よく、幸せな家庭に、しかも王家に身を預けられた。

しかし、この少女はこんな場所に預けられた。

同情はしない。けれど、きっと自分も一歩間違えれば…

（きっと、今でもあの箱庭（ままま）だったんだろうな。）

「んだよお前。こいつの仲間か？」

矛が此方に向いたのがわかるとサジュアは考えるのをやめた。

「いや？違うけど。」

「なら黙って見とけよ、痛い目に合いてぇのか？」

（俺は…）

《サジュア！》

後ろからナイトメアの声が聞こえ、ハッとする。見れば握りしめた手首はいつの間にかひしゃげていた。

「痛あ゛ぁッ」

「てめェ！何しやがる！」

男達が迫る。サジュアは悪びれた様子もなく笑った。

「…せっかく頼んだ酒、不味くしてくれた礼だ。相手してやる。」

第五部　「星の少女は鴉を告発する」　（上）（後書き）

予想外に長くなったので、二つに分けて投稿します。
（下）は本日１９：００に投稿予定。

第五部　「星の少女は鴉を告発する」　（下）（前書き）

（上）を読んでから（下）を読むのをお勧めします。

第五部　「星の少女は鴉を告発する」　（下）

「すげぇあのエルフ。」

周りはざわついた。

手首を折る音がした刹那、男は少女を掴んでいた手を離し、痛さにうめいた。

カッとなったらしい残り三人の男をエルフは纏めて相手にした。

殴りかかってきた男には背負い投げをかまし、次にやってきた男は、襲いかかるようにして来た為に空いたみぞおちにエルフは肘を打ち出して倒してから、最後に酒瓶を振り上げた男の口にグラスを突っ込んでから蹴りを顔に放つ。

力の差がはっきりとわかる喧嘩だった。

サジュアと呼ばれたエルフは震える少女を抱えると、店主に金貨を５枚も投げた。

「気にいったからこいつを貰うよ。金は…それで足りるな？」

それからエルフは颯爽と店を出て、その後を二人の従者が追う。青年は一礼してから、言い放つ。

《よかったねぇ、サジュアが店ごと飛ばさないで。

まぁ…守る価値もない店主だったけどね。

お酒、ごちそうさま。》

翌朝。それは瞬く間に噂となって村じゅうに話が回った。

＊＊＊

「…なんであたしを助けたの。」

人気のない宿屋にサジュアは少女を下ろすと、赤亜に鞄を開けさせて消毒液を取ってもらう。

力で胸ぐらを掴まるた際に質が悪い布で擦りむいた少女の首筋を消毒していると、彼女がそう呟くのが聞こえた。

「さぁな」

「……。あたしは敵じゃないの？」

あんたの友達を告発したのに、という言葉にサジュアは笑った。

「確かにすごい冤罪だったけどな。」

「…冤罪？」

「そう、だってアイツはなにもやってないもの。」

少女は目を丸くした。それから罪悪感が沸いたのか目を伏せた。

「…そんな…」
「まぁ大丈夫だろ。すぐに冤罪ってわかって明後日には出てくるだろうし。」
しかし少女は首を降る。
「…明後日じゃ遅いわ…」
「？何故だ？」
だって…と言った少女の言葉に今度はサジュアが目を丸くした。
『明日、彼は死刑になるんだもの。』

＊＊＊

翌日。ステイルは与えられた判決と、それを今すぐ広場でやるのだと言われて絶望しきっていた。
夜は明けた。もうチャンスはない。
（サジュアなんか大嫌いだ…！）

涙目で広場に連れられるスティルは心の中で叫んでいた。
そのうち、広場についた。公開処刑を聞き付けて近くの村からも来たらしく、人数はかなりいた。
「ここにいる罪人は、我々の大切な果実に呪いをかけたものである！樹そのものにかけたとしてこれは村にとって著しい問題だ！よって、死刑とする！！」

――死刑、死刑！！

騒ぐ村人から石や腐った野菜が投げられる。
避ける元気もない青年はぐったりとして丸太に座り込む。
執行人が剣を抜けば、もうすぐに自分の首は飛ぶ。
首が飛べば、自分はもう……。
（サジュアの、馬鹿。）
涙が流れた。

――死刑、死刑！！

執行人に剣が渡された。
最後になにかいう言葉があるか？と執行人が聞いた。

――――死刑、死刑！！

ステイルは息を吸った。そして叫ぶ。

「サジュアの馬鹿ぁぁぁあああ！！！！」

――――死刑、死刑！！

執行人が剣を振りかざした刹那。

「待て。」

と裁判長が止めた。

ステイルと執行人は何事？と目を向けた。

「こいつに裏切られた恋人が
直々に手を下すそうだ。」
その言葉ににんまりと笑う執行人の視線の先に、性転換(クスリ)を飲まなかったらしく、女性的な身体をした、サジュアがいた。

———死刑、死刑！！

一瞬、ステイルの思考が停止した。
恋人？誰が？
……サジュアが？！
「…え？」
ステイルが小さく声を漏らす。
サジュアは悲しそうな顔をした。
「お前を信じてたのに…」
「いや、待て、サジュア、ていうか、は？え？」
混乱するステイルの目の前でサジュアは執行人から剣を受け取った。
「こんな事する奴だったなんて…」
「いや！してないって！！」

サジュアが胸ぐらを掴んだ。
ステイルはそういえば先ほど相手を馬鹿と罵ったのを思い出した。
（殴るの？！ごめん！馬鹿って言ってごめん！）
しかし、手は振り上げられることなく顔が近づいた。
端正に整えられたそれにステイルは場面が場面だというのに顔を赤くした。
「冥土の土産にすればいい。」「へっ？」
――――死刑、死け…
「――――。」
「……っ…」
広場がざわついた。
暫し、ステイルは頭が真っ白になる。サジュアが手を離すと、糸の切れた操り人形のように青年は座り込んだ。
そして、
「じゃあな！」

剣が振り上げられた。

＊＊＊

刹那。

丸太にゴォォォオ！と炎がついた。

「ッ？！」

「っあああああ！！」

丸太は乾いていたらしく、炎は瞬く間に青年を飲み込んだ。

暫く沈黙がのこる。

炎はあり得ないほどの高さまで燃えてから、灰だけを残して消えた。

そこに青年の姿はもう、ない。

執行人や裁判官、村人は驚いた顔をした。

何事？と騒ぐそれに取り繕うように裁判長が言う。

「こ…これにて刑罰は完了する！」

村人はエルフが灰を悲しそうに掬いとるのを最後に見てから立ち去った。

残されたエルフに裁判官は慰めるように撫でた。

「貴女ならすぐに相手が見つかりますよ。
なんなら、僕といかがです？」

「…今はとてもそんな気分じゃないですよ…」

エルフの言葉にそりゃそうだとホビットは頷いて、それじゃあと立ち去った。

…そこに、ホビット族の少女が駆け寄った。

「…宿屋で待ってるから。」

「…いや、俺もいくよ。」

＊＊＊

サジュアは羞恥で内心死にそうだった。
ついでにいえばあの裁判官を絞め殺したくてたまらなかった。

（やっぱり昨日、爆発させればよかった。）

サジュアは他にも多くの作戦を考えたが、どれもこれも危ないもので村に大きく影響を与えそう――爆発的な意味の他に、村の政党的な意味――で、
あまりいい策とはいえなかった。

宿屋で取った自室につけば、ステイルがすでに風呂に入ったらしく濡れた髪でベッドに横たわっていた。

「よ、サジュア」
「何が『よ、サジュア』だ！ふざけんなよお前！
死ね！いっそここで死ね！」
「ちょ、せっかく助かったのに！」

枕を容赦なく投げるサジュアの言葉にステイルは苦笑いする。

サジュアは別にキスをしたわけではない。ギリギリの寸土目でとまりこう呟いたのだ。

『燃える直前に叫べ。飛ばしてやるから――――』

あともう一言なにか言っていたのだが、ステイルは聞き取れなかった。

「…助けてくれてありがとな」
「二度としない。」

ようやくサジュアは落ち着いたのか、少女を撫でた。
少女は、頷いてからステイルに気まずそうに袋を渡した。

「あの…」
「ん？」
「ごめんなさい…あたし、あんたのこと…」
「ああ。」

ステイルは笑って少女を撫でた。

「もう気にしてないから大丈夫。」
「え？」

だって君も助けるお手伝いしてくれたでしょ？と笑った。

少女はサジュアの術でステイルを宿屋に瞬間移動で飛ばした。

瞬間移動の魔術には、その場所から1キロ以内という制限があった。

だから、村の宿屋にステイルを飛ばすと同時に、彼が風呂やそれらに不自由しないようにと
宿屋を空にするために、村全体に死刑が行われると触れ回ったのはこの少女だった。

「ああ、助かった。」
「ありがとう。…えっと、名前…」
そしてこの時初めてサジュアとステイルは名前を知らないのに気がついた。
少女は俯いた。サジュアはまさか孤児だから名前さえないのではないかと思ったが、それは違かった。
「……ラ。」
「ん？」
「ステラ」
ステラって言うのよ、あたし。
生まれて初めての少女の笑顔は、とびきりの感謝の中で花開いた。

第六部　「星の導きと紫の軌跡」（上）

コツン、コツンと大理石の床を踏む音が響く。
あたりは静寂しかなく、その足音だけがこの空間に存在しているようだった。

突然、歩んでいた足を青年は止めた。

「回収完了しました。」

すると、何処からか魔方陣が浮かび上がり、その中央から真っ黒なマントに身を包んだ男が立っていた。

「回収ご苦労様です…と、主が仰られました。
……？何かいいことがありましたか？」

さて帰ろう、と踵を返して歩き出した瞬間。黒マントがそう言った。
青年は一度止まってから、振り返った。

そして、満面の笑みをして

「ああ。ようやく、無くしたモノを見つけたんだ。」

と言った。

黒マントは口元からしか表情が読めなかったが、ぽかんとした口から驚いているのがわかった。
青年は可笑しそうに肩をすくめてから、大理石の部屋を去った。

誰もいなくなった部屋で、マントの男は呟いた。

「“終焉ノ箱(ファイナル)”が笑うとは…」

槍でも降りそうだ、と口には出さずとも内心思うと同時に、再び魔方陣が現れて、光と共に消えた。

辺りは完全な静寂に包まれた。

＊＊＊

どっと宿屋の一室で笑い声があがった。

道行く村人は不思議そうな顔をして一度声がした方をみたが、なにも言わずにすぐに通りすぎる。

部屋は笑い(カオス)の渦だった。

茶髪の人間がムスッとした表情で立っており、ステラは崩れるようにして座り込み、サジュアはベッドの上に倒れ込んでいた。

「あははっステイル！あんたほど茶髪の似合わない人間はいないわ！」

「何これ傑作すぎるだろ」
「うるさいなー！染料これしかないんだから仕方ないだろー！」
ステイルは昨日処刑された事になっている。
九死に一生を得たステイルだったが、
同時にそれは、彼が村の中をあちこち調査するのが難しくなった事でもあり、
変装なしでは外にすらでられない事でもある。

「言えば買ってやったのに。」
「だってお前朝いなかったじゃないか！」
「当たり前だろ？誰かさんのせいで調査進んでないんだから。」
「うっ。」

サジュアのため息混じりの声にステイルは息をつまらせた。

パートナーが捕まった事にとって、予定が大きく狂い、
本来なら昨日の時点で調査をより深くするつもりだったのが、今日に変わったのだ。

それでも、本来は明日の予定に変わったのだが、今朝、手がかりが掴めたというナイトメアの手紙が届いた。

実はステイルを助ける作戦の際に、ナイトメアに見せると別の意味で死刑になりかねないということで、
サジュアは前日に白亜と赤亜を調査に行かせたのを理由に、ナイトメアを果樹園に向かわせたのだ。

それが功を期したのか、手がかりが一つ見つかったのだという内容に、

サジュアは早朝にステイルを叩き起こして変装をするようにと命令した。

「早く行かないと、通りの人増えちゃうよ？」
「だとさ、ステイル」
「ステラまで…」
がっくりと肩を落とすステイルにステラとサジュアはまた笑った

＊＊＊

ナイトメアが手がかりなるものを指差したのは一輪の花だった。
花はヤドリギで恐らく果実が青くなった事件から、誰も手入れをしなくなったのをそれは物語っていた。
《ね？言ったでしょ？》
「ああ…。同じだな。」
林檎の樹の根っこに根付いたヤドリギの花は青い色をしていた。
そう、つまり。

「果実だけじゃないわけだ。
たまたまコレが花じゃなくなった時期に、青くなる原因が起きたって事か…。」

サジュアは村長の元に向かおうとしたが、ステラによると村長はまだヴァルネシリアから帰ってきていないのだという。

「……おかしいな。俺達より遅いなんて。」
《意外と村長が犯人だったりしてー。》
「村長はそんな人じゃないわよ！」
「ステラ、先入観で物事を見るのはよくない。
あとステイルとナイトメアもわざとらしくいうな。大人げない。」
「へーへー」
《はぁい》

疑念が一つ、増えた。

＊＊＊

昼飯後。大理石の部屋に青年は呼び出された。
不服そうな青年に先ほど謁見したマントの青年が笑った。
「そんなに不服そうにしないでよ。」
「僕、いつもゆっくり食べる派なんだけど？」
「…ふふ…君らしい。…ああ、あのお方が来たみたい…」
不服そうな青年はその言葉に肩をすくめた後、膝を追って頭を垂れた。
マントの青年に天から赤い光が降り注いだ。
あたりに強い旋風が巻き起こり、魔力が閃光となり、あちこちに走る。
「……—《…お前はもう一度自分の立場を理解せねばならない。…“終焉ノ箱（ファイナル）”よ。》」
先ほどより幾分にも低い声がマントの青年から発せられた。
ファイナルと呼ばれた青年は頭をあげる。
「自分は、貴方に従うのみですよ。…それで、用件は。貴方が長時間そこにいると、媒体に負荷がかかりますから。
貴方も、器を殺したくはないでしょう？」

ファイナルの言葉にマントは機嫌の悪そうな声で答えた。
偉そうであるのに、内容が正しく一理あるのが気にくわないらしく
ソレは鼻で笑う。

「……《口の減らないエルフが…。ふん、まぁいい…》」

にんまりと口元が、マントから覗いた。

「…《時期にこいつよりいい器が手にはいる…。
ファイナル、お前にはその器を捕まえてもらうぞ?》」

――――名は、星を意味する者。ホビット族の娘を連れ拐え。

第六部　「星の導きと紫の軌跡」（上）（後書き）

中編は本日１８：００、後編は２２：００予定です。。

第六部　「星の導きと紫の軌跡」（中）

翌日。村長に不審疑惑がかかった故にサジュアは二つの班に分けることにした。

ナイトメア、赤亜、白亜は村長の行方を追うことにして早朝に出掛けていった。

サジュアは村人から徹底的にステラの言っていた、黒髪の魔術士について情報を得ようとした。

村人は既に犯人は処刑されたじゃないか、と不審そうな顔をしていた、が。

「ああ、君はあの犯人の恋人だっけか。
いいよ。恋人の裏の顔知りたいんでしょ？」

と、決死のサジュアのあの犯人の恋人設定がこんな所で効果を発揮して村人は途中から快く教えてくれた。

「黒髪、茶色の目、魔術士、黒マント…で、男か。」
「俺は茶色の目じゃないのに…」
「いや、金の目って証言もあるからな。」

隣で情報をメモする変装したスティルが肩を落としたのを見て、サジュアはそう呟くように答えた。

そんな中、こんな話が子供のホビットから聞くことができた。

「ねぇお兄ちゃん、知ってる？
村外れにある森にもう一軒お家があって、そこに魔法使いが住んでるんだって！」
んなおとぎ話なんか宛になるかとステイルは思いつつ、サジュアにそれを伝えた。

「…おとぎ話なんか宛になるのか？詩人の歌ならともかく…」
「そうね。それ酒場であたしも聞いたことあるけど、おじさんやお婆さんの世代からもう伝わってる話だし…」
「いや、案外ビンゴかもしれない。生きてるかはともかく。」
赤髪のエルフの答えにステイルは首を傾げて答えた。
…“もし”この魔法使いが生き続けているのではないのだとしたら…
サジュアはステラを見て笑った。
「ステラ、案内してくれないか？」

＊＊＊

鬱蒼とした森に響く鳥の声が、この世とは思えないほどに怪しげな雰囲気にしていた。

「不気味な森だな」

「…いやさっきから出てる魔物の方が不気味！」

サジュアはステラを抱き抱えながら走っている。ステイルもまたその横で悲鳴じみた声をあげている。

背後では面白い位に青い植物型の魔物が、消化液を吐き飛ばしてきた。

「ひっ」

「ステイル、無駄な動きするな馬鹿。」

「ステイル馬鹿？」

「お前なぁッ！お前が明かりを灯すからだろ？！」

だってそんなの知らなかったんだもの、とステラは唇を尖らせて手に持つ煤だらけのランタンを抱き締めた。

（あたし、迷惑ばっかかけてる…）

暗いだろうからといって持ってきた大事なランタンだったが、ステラはそれさえ投げ出したいくらい気分だった。

あの意地悪な店主な酒場から助けてくれたエルフに、彼女はまだ何もお返しできていない気がしていた。

同時にサジュアは少女に『もう充分世話になっている』とは言わなかった。

サジュアにはまだステラが必要だった。
あまりにも自分の知る領域から遠い、ホビットの村の常識に追い付ける気がしなかったからだ。

（だから、まだ言ってやらない。）

ステイルは言ってあげればいいのに、可愛そうだ。とサジュアを避難したが、エルフが首をふった。

ステイルのいう通り自分は
意地悪なのだろう、
腹黒いのだろう、

（それでも）

俺は目的の為に、動くのみだ。

横でステイルが七つ武器（セブン・トリッカー）をついに持ち出した。

七つ武器はカスタムによって武器変形を行う武器で、扱いが難しい事から
操れる戦士は少ないが、銃から剣、槍と多用に変わるそれは戦場でかなりの多様性を抱く武器だった。

カチャカチャと隣で機械の音がする。

「ステイル、火炎放射機はダメだぞ。」
「わ、わかってるって！」

いや、わかってなかっただろうとサジュアは呟いた。
ステラはその呟きに小さく笑う。

（仲…いいんだなぁ）

そんな中、ようやくカチャカチャとした音が止まり、ステイルは一度加速してから振り向いた。

「よっしゃ、できた！」

歪な機械を手にステイルは箱を開くようにしてレバーを下げる、同時にサジュアは跳躍して樹に飛び乗った。

「七つ武器（セブン・トリッカー）第五式玩具『アイス＝キャノン』！」

レバーから引かれたと同時にとてつもない冷気が四角い銃口から発射される。
対抗してか、植物型魔物は消化液を吐き出した。
だが、届く前にそれは氷結して地に重量に従って落ちるのだった。
冷気によって魔物の動きが遅くなる。サジュアはステラを抱えながら詠唱を開始する。

「……《荒ぶる風よ、一陣の刃となり、対象（ターゲット）を千々に裂け！
『神風の殺人風』！！》」

圧縮された風は刃となり、植物型魔物に吸い込まれるようにして向かった。

鎌鼬にも似たその技は、サジュアが独自に身につけたもので、殺傷力を高めた物とも言える。

魔物は悲鳴を残して散り散りなる破片だけを残して死に絶えた。

「……うわぁ、サジュア。もっと何かなかったの？」

樹からステラを抱えているにも関わらず軽々と着地するサジュアにステイルはそういえば無残になった魔物から目をそらして問いかけた。。

「再生されると面倒だからな。さっさと殺った方が楽だろ？」

「あっ、見て！」

サジュアはステラを下ろしながら答えていると、少女が突然指をさした。

「家があるわ！！」

「――どうかしたの？お母様（サニー）。」

いつもなら寝たきりの老婆が、樹で作られた車椅子でカラカラと押して自室から現れたのをみると、

茶色の毛色をもつ短髪の女は朝ごはんの仕度しながら聞いた。

老婆はしばらく少しばかり白く濁った青い瞳で窓を見つめてから、
にっこりと笑った。

「…やれやれ、なんの因縁かね。
お客さんだよ、月（ルーナ）。」

＊＊＊

ファイナルは顔を輝かせた。
そして同時に落胆もした。

「ああ、なんで君は僕が嫌な仕事をしなきゃいけないときに限って・・・。」

と、後ろで動く気配がした。
用意が出来たと報告する使い捨ての手下の言葉に頷いた。

手下は人間ではなかった。
ヘドロのようにからだの一部分がスライム状のモノに寄生されており、どこか嫌悪感を催させるものだった。

ファイナルはそれらに目さえ向けずに合図した。

「仕方ない……スイッチを入れてくれ。」

手下の指がスイッチを押した。

途端、地響きが森で響き渡った。

第六部　「星の導きと紫の軌跡」（中）（後書き）

後半は２２：００予定です

第六部　「星の導きと紫の軌跡」（下）

ノッカーを叩いた矢先に、サジュアはぴくんと身体を震わせた。右手にはいつの間にか剣を出せるように魔力が集まっていた。

何かざわついた予感がする。

と、家から老婆と女が現れた。

「はい…？」

「おはようございます。

ヴァルネシリア騎士団の調査の者ですが、お話を伺いに来ました。」

ステイルが人の良いにこやかな笑顔を浮かべる横で、ステラは女をじっと見つめていた。

（…あたし、この人を知ってる…？）

居酒屋で見かけた気がする姿にステラは首を傾げた。わざわざこんな森の奥から居酒屋に来たのだろうか？

「…それで、村の果樹園の異常の原因を調べていまして…

……サジュア？」

女に説明をしていたステイルがサジュアの違和感に気付いたのか振り向いた。

「……。」

「サジュア？」

しばらく虚空を睨んでいたが、エルフは首を振ってなんでもないと告げてから、もう一度そちらを見てから女が招待する家の中に消えた。

ステラは驚愕した。村外れの家なのだから、きっと物資があまりないだろうと思っていたのだ。
確かに新しい家具は何一つなかったが全て壊れる事なく、返って家に調和しているような感覚がする。

ステラがじっと食器棚を観察するようにしているのを、女……ルーナは微笑んで見ていた。

「食器が好きなの？お嬢さん。」

ステラは首を振る。別に食器が好きな訳ではない、
ステイルとサジュアは奥の部屋にいる老婆、サニーという人物から話を聞いている間
この部屋で待つように言われたからここにいるだけだ。

「…でも、嫌いではないわ。綺麗だから。」
「そうなの。…ああ、そうだ。せっかくだからお紅茶をいれようか！
ステラちゃんの好きなカップを持って…」
「え？」

ステラは顔をそちらに向けた。

「なんで…あたしの名前…」
その呟きに蒼白になって『しまった』という表情がありありとルーナに浮かんだ。
「貴方…何物…？！」

＊＊＊

「…ひとつ、お聞きしますが。」
サジュアが剣を構えた。
「彼女（ステラ）は、それを知っているのですか？」
老婆は静かにルビーの指輪を手にしてクックッと笑った。
ステイルは素知らぬ顔で横に立っている。
「…知らない、否。隠したのですね？」
サジュアの目が細くなる。
老婆の目元が笑んだせいかシワだらけになった。

「……ああ、そうさ。」

その肯定の言葉にサジュアは頷くと、踵を返して扉を蹴り開けた。

「貴方、何者なの…？！」

ステラの呟くような声が女性の顔を蒼白にさせていた。

サジュアはそれがなんの会話でなったのはわからなかったが、剣を手にしたまま女性に言い放つ。

「…表へでろ。」

戸惑う様子を見せたものの、サジュアの開け放った扉からステイルが押している車椅子にすわる老婆を見れば、女は頷いて大人しく従った。

玄関まで向かった時だった。

ゴゴゴゴゴ……！！

突如大きな揺れが辺りを襲った。

「サジュア！」
「ああ、わかってる！！
…ステラ！ステイルと車椅子を変わってくれ！」

ステラは何がなんだかわからない様子だったが、その言葉に頷いて車椅子のノズルを握り、その勢いのまま老婆と玄関から飛び出した。女も後から続く。

それでいい。とサジュアは思った。

（…君がこれ以上関わる必要はない。）

玄関の先に設置されていた、サジュアが屋敷に入る前に作り出して置いた魔方陣が結界を作り出した。

「な…っなにこれ！！
サジュア？！ステイル？！」

ステラがびっくりした様子でこちらを見る。
その表情に一瞬やりすぎではないかとステイルは言いそうになるが、サジュアの顔を見て口をつぐんだ。

「……対象の捕獲を完了。」

冷酷な笑みがステラの心を冷やす。

（そん、な……。）

――――貴方は信じていたのに。

＊＊＊

「そんな！どうして？！あたしが何をしたって言うの！」
「少し静かにしてくれないか？」

ぎらつく剣が不気味で、少女の身がすくんだ。それを見たルーナも叫ぶ。

「貴方達、仲間でしょう？！」
「仲間…そうだなぁ…
冤罪から始まった関係は仲間なのか？」

サジュアの言葉にステラの崩れ落ちた。否、膝をついた。目には涙を浮かべ、震えていた。

「そう…よね…あははっ…あたしの馬鹿…
…勘違いしてた、だけかぁ…。」
サジュアはきっと、仕返しをしようとしている。
だから、仲間と偽って裏切り、より深く絶望へと導こうとしているのだ。
ステラはそう考えて、言った。
「あたしを冤罪にする気？」
「まぁそれも面白いかもな？」

サジュアが肩を揺らして笑ったと同時にカツン、と云う靴音がした。
それはサジュアの物でも、ステイルの物でも、勿論ステラ達の物でもなかった。
黒いAラインのロングコートが風になびく。サジュアは笑うのを止めて、踵を返して振り替えると剣を握り直した。
幾多の木々の間から現れるスライムに寄生された人間達と、それらを率いる青年の姿。
サジュアは前日にもあったこの男をよく覚えていた。
黒いローブを羽織るそれについた金のブローチ。それを見たステイルは静かに呟いた。
「その格好…魔神信仰者（ダーカルス）か。」
「そう。僕らはダーカルス。四神信仰者（ヴァルネシリア）と相反する者。」

だから、何？というように青年はステイルに笑ってから、サジュアに目を向けた。

「また会ったね。サジュア。」

「五月蝿い…お前に名前を呼ばれなくない。」

にこやかなその微笑が胡散臭いとサジュアは目を細める。

対して青年はああそうか！と手を打ってからお辞儀した。

「自己紹介がまだだったね。

僕は…ダーカルス幹部『終焉ノ箱（ファイナル）』。以後よろしく」

「興味ないし、よろしくなんかしてやるか。」

その言葉にファイナルは勝ち気な子だ。と笑ってから、手を上げた。

「……だが、それはいつまで続けられるのかな？」

とたんに寄生したスライムがぐにゃぐにゃと動き、人間を動かし始めた。ものすごい数のアンデットがサジュア達に襲いかかった。

「…はは。」

サジュアは鼻で笑ってから、バスタードソードを構えた。ステイルも、今回は槍を模したタイプに七つ武器を変形させている。

そして、二人は背中合わせになると武器で空を凪いだ。

凪いだ空間にいた魔物はあえなく切り裂かれ、再生能力が追い付く

前にサジュアが業火で焼き付くした。

「……舐めるな。」

すぅっと貪欲に死を求める赤い目だけが爛々と光輝いた。
そして呟いた言葉にステイルが槍を回りながら応答する。

「…ああ癖も相変わらずか…」
「あ？」
「ファルシア……」
「なに言ってんだアイツはサジュアだ！」

バァァアアン！と背後で爆発音がした。

（…負けてられないな。こっちも早く魔物を消さないと。）

ステイルは槍を振り回した。

「だぁあああああッ！」

＊＊＊

楽しかった。
楽しかった。ただ楽しかった。
人を殺すのが自分の業ならば
受け入れられれば容易い事。

なのに。

キィィイ――ン！！

耳鳴りが止まない。
嘆きの声が内なる場所に響く。
悲劇が映像のように流れ出る。

「ありがとうルナ！」
「私達はずっと貴方を応援してるわ。」
「可哀想なルクティファス…貴方は…」

「世界を壊すのは…お前だって同じじゃないか！！」

自分とどこか似た、
本でよく見る赤髪を一つに束ねた聖女と、黒き翼をもつ修道女が剣を掲げるようにする。

まわりは真っ暗な闇。

彼女らの周りには幾多の仲間がいた。
その前で、赤い聖女達は涙を流した。

「……これで、終わりにしよう…。」

ごめんなさい。守れなくて
ごめんなさい。愛してるのに
ごめんなさい。ごめんなさい。

「……《我、神の力を受けし紅の聖女は暗黒世界に鉄槌を下す》。」

持っていた剣を、地に深く突き刺した。一筋の涙が頬を伝う。

ああ、

何故、私は。

（普通の人として生きられないのだろう…？）

「《世界ノ終焉(ラグナロク)》！！」

とたんに、世界は光に包まれて――――。

「…っ…力を持つ(こんなの)ものはもう…俺で充分だ！」

サジュアは剣を振り上げて、叫んだ。

「はぁあああ！！」

魔物の肉片が血飛沫と共に砕け散った。

＊＊＊

ステラは結界の中で泣いていた。
やはり自分は一人なのだ。
孤児だから仕方がないのだ。
「ふっ…ぅ…うあ…」
そんな少女をルーナはいてもたってもいられずに、手を伸ばして抱き締めた。
（…え……？）
女は懐かしい香りがした。
どこかで嗅いだことのある花の匂いがした。
「ごめんなさい…ごめんなさいね…。私はただ、娘（あなた）を守りたくて…！」
ああ、そうだこの匂いは。
ステラは古い記憶を掬い上げられた気持ちだった。
今までなぜ忘れていたのかと思うくらいにそれは鮮明だったのだ。
捨てられた森の中で、最後まで未練を残しながら去っていった女を思い出した。

「おかあ…さん…？」
「…祈りの力をもつお前をねぇ、あたし達ぁ、守りたかったのさ…」
老婆も申し訳なさそうに呟いた。
魔物はサジュアの張った結界に入ってくる事はなかった。
この結界は内結界で対象を出られなくする物だ。
外からやって来るものは容易く入れてしまうのが欠点だが、やって来る魔物はすべて二人が倒していた。
そこで、ようやくステラは気づいた。
「あのエルフはね。私達を保護しようとしてくれているの。だからステラ…信じなさい。
貴方には『祈りを届ける力』がある。」
ルーナの言葉に、ステラは顔を輝かせた。
サジュア、仲間は、自分を大切に思ってくれている。
確実にサジュアにばかり敵がいく様子をみると、ホビット族の少女は手を組んだ。
「お母さん、でもあたしお祈りなんかしたことないよ。」
「大丈夫…いい？こう言うのよ。
…《星の導きよ、我が願いを聞き届けたまえ》…」
――…星の導きよ、我が願いを聞き届けたまえ。
我を守護せし星の光よ、我に力を与えたまえ。
そして、汝、彼の者に祝福を与えん…――

ステラがそれらをいい終えたとき、ふわりと光球が結界内に浮かんだ。
そしてそれらは形を変えて結界を飛び出し、サジュアを取り囲む魔物を光輝く帯でもって動きを封じた。

「サジュアっ今だよ！」

しかし、赤髪のエルフは動かなかった。

「…っち…」

否、動けなかったのだ。

＊＊＊

ステイルはどこか辛そうに敵を刻むサジュアに戸惑いを感じた。
何故か、それが危険な信号を感じさせるものだったからだ。

「……お前…サジュアの何を知ってるんだ…？」

自分に群がる魔物をステイルは全て終わらせればエルフに飛びかかる。

エルフもまた槍を空間から召喚すると、目はサジュアに向けたまま
ステイルの槍を受け流した。

「彼女は僕の大切な人だ。」
「なら何故お前はサジュアを狙う？」
「否、僕の今の目的は彼女では…」

ステイルは心の底からファイナルに嫌悪した。
今は。というのはいつか自分の近くから幼なじみを奪うのを意味する。
それが腹ただしくて、ステイルは槍を横凪ぎにした。

「ふざけるな！サジュアは、サジュアの道を貫く！
いつ何時だって連れ拐われてたまるか！」

ファイナルは大きく跳躍した。
何を知っていてそれを言う？と彼はステイルにいい放つと上空から
槍をつきだした。
刃が、ステイルの頬を掠めた。

「君は彼女の進み道がわかっているのか？」
「っ…」

サジュアは話そうとしない。
弱さを見せないようにしている。だからこそ彼女は男だと偽るのだ。
ステイルはまだ全てを理解してはいない。

だが。

「サジュアがお前を嫌ってるのは知ってるよ！！」

「ステイルっ！」
槍がファイナルに届こうとした時。ステラの声が響く。
「サジュアが！」
そこには頭を抑え、剣に支えられるエルフがいた。
＊＊＊
「サジュア？！」
「…なんで、こんな時に…」
キリキリと締め付けられるように頭が痛い。目眩が激しくて立っていられない。
ステイルが駆けてくるのが見えた。
しかしサジュアの目はただ、紫の瞳を捉えていた。
「……ッ馬鹿、ステラを守れ！

そいつの狙いはステラだって言ったろ…！」
青年はにっこりとする。
「大丈夫。ファルシア。
君の記憶は…ちゃんと君の中にあるよ。」
それから、青年はステラに歩み寄る。
「さて…どう拐おうか？」
咄嗟にステイルがつきだした槍を手で柄を握り、止めて見せると、
ファイナルは彼を蹴り飛ばした。
「…うッ」
「ステイル！」
その勢いは強く、その延長線にあった樹にドッとステイルは背中を
打ち付けた。ステラは眼孔を開いて、唱えた。
「…《聖なる星の流れ（シューティングスター）》！」
「なっ…？！」
光球が、ファイナルの不意をついた。サジュアは痛む頭で考えなが
ら動けない代わりに唱える
「…《疾風（エアスティンガー）！！》」
風がナイフで切りつけるようにエルフの肌を傷つけた。

「…？！」

ファイナルは驚愕の表情をしてから、またいつもの笑みに戻る。
次に傷ついた場所を服の一部を引きちぎって手当てすると、笑って答えた

「……しょうがないな。僕の手には余る。
これで帰るとするよ。地震の装置はとりあえず使えるって実験でわかったしね？」

そして、エルフは森の中へ駆けていった。

「……行ったな。」

サジュアは気配が完全に消えるとそう呟いた。気がつけば頭痛はなくなっていた。
ステイルもまた助かった、と笑って立ち上がる。
ステラは母親に抱きついていた。

「お母さん！」
「よくやったわ。ステラ。」

星（ステラ）はもう、一人ではなかった。

「こっちは一件落着だな。」
「……世話がかかる。」

ステイルの笑顔とは逆にサジュアがため息混じりにそう言ったが、
その光景が二人には嬉しかった。

＊＊＊

村長は無罪だった。というのも、ナイトメア達が彼に追い付いたのは村から真逆のノクターンの地域で、迷子として騎士に保護されていたのがわかったからだ。
そもそも村長に魔法を使える力はなく、犯人になる理由もない。

ようやく村に帰ってきた村長にステイルは報告をすると、彼は嬉しそうにした。

「え？青くなった理由がわかった？」

「ええ。この地域は昔、歪みが発生していたようなのです。
その時に運ばれた土の層が青くそれがインクを吸った切り花のようにして、果実が青くなったのでしょう。」
「何故今ごろ……」

花は青くなかったという村長の言葉に、サジュアは村人が次いでくれた紅茶を手にしながら答えた。
「ここの果樹は皆同じ時期に植えたものだそうで。
…ちょうどその花が落ちた時期になって根がその層に届いた、それ

だけです。」

村長の隣の部屋ではステラとルーナ、それから老婆のサニーが何年ぶりかの家族の再開を喜んで同じ部屋のベッドに眠っていた。

サジュア達は複雑だった。

というのも、この事件が解決したのはファイナルのお陰でもあるからだ。

本当は外に獲物を誘導するためだけに地震を起こしていたようだが、地震は果樹園の一部に地割れを起こしていた。

剥き出しになった層から青い土が検出され、それが異世界の土であるのがわかるとサジュア達は本部にこの場所付近に過去で歪みにあっていないかを調べるべく資料を求めた。

そしてそれは大正解だった。

歪みは発生しており、ためしに土を水で解いて花に与えてみると、青くそまった。

「…なんかすっきりしない。」

「まぁまぁサジュア、良かったじゃない。これで帰れるし！」

早く城の肉料理が食べたい！と言うスティルに、なにやら村長は用があるらしく彼を呼んでいた。

サジュアは空気を読んでステラ達のいる部屋に向かう。

すやすやと幸せそうに眠る少女の頭を撫でた。

「……助かった、ありがとうな。ステラ。」

幸せに暮らせよ。とサジュアはステラが起きていた時にはけして見せなかった優しげな笑みを向けると、部屋を立ち去った。

＊＊＊

五日後。
ヴァルネシリアでサジュアは黙々とサラダを手にしていた。
村の方が取れたてで美味しかったなぁ、などとぼやきつつトマトを口にしていると、向かい側に幼なじみが座る。

「…またサジュアは朝ごはんサラダかぁー」
「朝から肉なんか食えるか。」

ふん、と顔を背けて答える。と、ステイルが咳払いをした。
サジュアはそちらに顔を向けるとなにやらニヤニヤと気持ち悪く笑うステイルに眉をしかめた。

「……なんだよ。」
「いや？別に…モテる女は辛いよなぁ？」

誰が女だ、と机の下で鋭く足を踏んでやる。

ステイルは痛さに悶絶しながら、いいからこれ読みなって。と新聞を渡す。

「はぁ？」

差し出された新聞を受けとると、サジュアは目を滑らせる。

そして、とある一点においてエルフはふぅんと頷いた。

「……で、何が？」

「いや何じゃないだろ。

青い果実が大人気なんだってさ。」

「安全ってわかった今、珍しさに皆惹かれるんだろ。」

まぁなーと言ってから、ステイルは突っ伏した。

「…って違う違う！その下！！」

「下ぁ？」

再びサジュアは新聞記事を読み始める。

下の新聞記事にはこう書かれていた。

――『星の子ステラ、ホビット族を導く光に！

目に新しい果実が並ぶ今、その青い果実の起源である村で孤児と言

われていたホビット族の少女に光が射した。

ホビット族は小規模なる団体で団結して生きる一族である。

そんなホビット族が今、少女ステラさんによって変わろうとしている。

青い果実事件で数多く貢献していたホビット族の少女が時期村長候補となったことで、

数多くの場所で貿易関係を持つ方針に代わり、今あちこちから果実のオファーが来ている。

また、それを聞き付けたあちこちのホビット族の村でもそれを真似する動きが見られた。

時期村長候補の少女、ステラさんについては先日、実の家族に引き取られ現在村で暮らしているのだという。

そんなステラさんに我々は独自インタビューをすることに成功した』

――…

一段落下に続く文に目を向けると、今度こそサジュアはフォークを落とした。

「……？！」

――…『ステラさん、家族が見つかってよかったですね！
「はい！」

どうして見つかったのか、良ければ教えて下さいますか？
「ヴァルネシリア騎士団の方々が、家族を導いて下さったんです！」
なるほど…ああ、ではこれからの方針についてはいかがですか？
「もっともっと、世界に美味しい果物やワインを届けたいと思っています。
だから、今はとにかくホビット族と他族の壁をなくすように動いているつもりです」

いやぁ、素晴らしいですね！そんなステラさん、好きな人や憧れの人とかはいるんですか？
「はい！あたしを助けてくれて、守ってくれた人…ヴァルネシリア騎士団の方がいるんですけど、その人があたし大好きです！
冷たい人に見えるけど、友達の為に女装して助けたり、本当は優しくてカッコいいんです！」

なるほどなるほど～。ではその方になにかメッセージは？
「貴方のお陰で、あたし達はいま幸せです。
またいつでも村に来てください！」
以上、ヴァルネシリア新聞でした！！『…――

「…どういうことだよ…」
「いやぁ…よかったな」
《サジュアのアレが女装に見えたんだねぇ…。》

爆笑するステイルの傍らで、ステイルを助けるために女の姿になった話だけはサジュアから聞いていたナイトメアが、クスクスと笑って新しいフォークを差し出した。

「・・・・そうだ。ステイル」
「ん？」
「書類、よろしくな。オレはもう寝る」
「ちょ、オレに押し付けんの？！」

どさっとおいた調査報告書を見てステイルはサジュアの服のすそを掴んだ。
ナイトメアはそれをけりつける。

《サジュアは検査なの！》
「検査？」
「相手しなくていい。いくぞナイトメア」
《はぁい》

廊下に出たあたりで、過度から白亜と赤亜が現れた。

「主人・・・・」
「ごめんなさい。守れなくて・・・」

二人はずっと森での戦闘時のことを気にしていたらしく、しょぼんとしていた。
ふたりの頭を撫でると、サジュアは微笑んだ。

「大丈夫だ。俺は生きているだろう？」
「でも・・・」
《ほら。もう行かないと。》

二人の従者に背中を見せながら、サジュアはカツカツとブーツ音を鳴らして、
ヴァルネシリア城内にある医務管理局まで向かった。

＊＊＊

五日前のあの日――――――。

「ステラは貴方たちの娘ですね？」

サジュアの言葉に老婆はうなづいた。

「我々ホビット族でも魔力を持つものは、居るけどねぇ・・・。けれど私たちは魔力ではなく・・・・異能の力なのだよぉ・・・・」

「異能？」

老婆の言葉にステイルが首をかしげた。

サジュアがわかりやすくしていった。

「魔術は魔力から生み出される。逆に魔力さえあればどうにでもなる。

けれど、異能はちがう。ＤＮＡレベルで継続されていく特殊な能力。魔力を使わない魔術。

それが、―《異能》だ。」

「そう・・・我々は、あの村に居られたのもそのおかげ、さ・・けれど。」

「それを狙う輩があられたのですね。」

サジュアの言葉にサニーはうなづいてため息をした。

机においてあるルビーの指輪が生生しく光る。

「そうさ。最初は手紙がきてね。けれど、無視したもんだから警告がきて、

泣く泣く、一度この家を捨てたのさ。けれど、その直前にルーナが陣痛を初めてね。

無事生まれた配意が、逃亡の旅に赤子は連れて行けない。それに、ステラが狙われるからねぇ・・・」

「だから、捨てたと？能力が開放したらどうなさるつもりだったのですか？」
「そうさ。しばらくしてもどって来て今に至るが、ちょくちょくあの子の居る酒場には顔を覗かせたよ・・・。でも、あの子は強かった。神に祈ることも、金に頼ることもなかった。」
「そう。そして誰にも頼らなかった。」
彼女は孤独だった。それでも、貴方はよかったのですか？
すると、老婆は笑った。
「孤独のうちは、あの能力が封じられるからねぇ・・・。」
なるほど。といってから。窓に目を見やった。
そこに、物陰がうつる。
（まずいな。アレは、見かけは地底剣先だが・・・構造は衝撃をつくる機械か・・・。）
サジュアはそうして、剣を抜いた。
「ひとつお聞きしますが・・・・・」
＊＊＊

扉が開いたと同時にサジュアは黒いベビードールに身を包ませてたっていた。
性転換の薬も検査の上では邪魔なので抜いてある今、
女の身である上に、いつもなら黒いコートによって見えない箇所にある幾多の傷のある彼女は
どこかはかなさが見え隠れした。

「また、無理をしたのですね。」

男のため息にサジュアは肩をすくめた。

「・・・・だめか？セレル」
「当たり前です。貴方は記憶がないために情緒不安定なんですから。」

セレル医師はそう言えば、スイッチを押してカプセルの電源を入れた。
プシューという音と共にそれは扉が開くと、サジュアはそこに横になった。
口元に人工呼吸器が当てられる。

「それに。」

閉まった扉とともに、睡眠ガスが人工呼吸器内にあふれ、液体が満

ちてくる。
液体がすっかりカプセルに満ちれば、カプセルのガラス越しにサジュアを見つめて
セレル医師はいとおしげに囁いた。
「君は・・・・かの破壊の聖女(紅のマリア)の生まれ変わりなんですから。
いとおしき、我が『生きる兵器(アンドロイド)』・・・・。」
眠りについたサジュアがその暗黒の言葉を聴くことは、ない。

第六部　「星の導きと紫の軌跡」（下）（後書き）

次回はサジュアの第一の秘密編のつもりです！

第七部　「殺戮兵器は少女の名を持つ」（上）

カプセル――それはセレスが発明した記憶を蘇らせると研究されている機械。

それに入って眠るといつも見る夢。

サジュアの記憶にはない情景が…けれど懐かしさのある景色が、ありありと浮かぶ。

そして同時にその身体は自分のものではなかった。

長い白髪の、シスター服を着た幼い少女が目に涙を溜めて剣を握っていた。

（怖いなら持たなければいいのに…）

そうサジュアは思ったが、自分の視点の少女は剣を離すことはなかった。

ただ、呟くように

「ごめんなさい…守れなくてごめんなさい…。

大好きなのに、大好きだったのに…。

ねぇ……これで最後だよ、ね……？」

どうしてなのか、サジュアの意識は違うと首をふった。

何が最後なのだろう？
何がごめんなさいなのだろう？
なにもわからない。
なのに…

（何故だ…なんで俺はこの光景を知っているんだ…？！）

この後何が起きるのかも、少女がどうなるのかも、なにもかも。
サジュアは、全て知っていた。
おぞましい悪寒が身体を巡り、躊躇する自分とは真逆に、少女は何かを決したように剣を地につきたてた。
カッと光が満ちた次の瞬間、
白くなるはずのそれは真っ黒な世界になっていて。
気づけば自分とその少女背中合わせになっていた。

「次ハ貴方ノ番。」

凛とした声が鈴の音のように、鼓膜に届いた。

「！！」

ぞくっとした寒気と同時に恐れから振り返る。

しかし、そこには不気味さを残した空気以外、誰もいない。

（…そういえば）

先ほどの少女も見覚えがあった。

サジュアは今持っている自分の記憶を辿る為に暗闇の意識下で足を進めた。

＊＊＊

ナイトメアはサジュアがカプセルにいる間、部屋で待機していた。

本当は研究者の類いに大好きな人を任せたくはない、

しかしそれが一番サジュアにとってプラスになるならば…と、保護者代わりの夢魔は考えたのだ。

彼が待つのは質素で、皇女が住むような部屋ではないその一室。
そこは、サジュア自らが好んで選んだ部屋だった。

「…」

白い壁に大理石の床。もしこの部屋に取り柄があるとしたら大きな窓だけだった。

アンバランス差のあるこの部屋は、サジュアが自らを追い詰める為に選んだようにしかナイトメアには思えなかった。

一面の白色、そして赤色は、今のサジュアの最初の記憶。
研究所からサジュアをナイトメアがようやく助け出すことができた、忌々しい実験部屋の色。
ナイトメアは思い出していた。
あの時の記憶を――――。

＊＊＊

ヴァルネシリアとノクターンの国境間にあった科学都市トーセルハイデ。

普段から時々爆発音があちこちの研究所から響いていた国だったが、その日だけは違った。

青年の怒りと少女の追い詰められた最後の悲鳴が響いた。

「いやぁ――――！！」

《あああああああッ！！》

複雑な魔方陣が二人を中心に都市国家の土地じゅうに広がった。

そこに住んでいた人々が足元で光る魔方陣を認知するかしないかのうちに、

重々しい爆発音が轟き、光と突風がその町を包んだ。

大きな泡が水面に現れて弾けたように、それは一瞬の事だった。

全てを黒い光が辺りを飲み込み、風が建物を抉るように奪い去る、次の瞬間には全て灰と土台だけが残る建物だけを残して消え去っていた。

パチパチといまだに燃えカスがのこる、廃墟はまるで1日たった灰だらけで薪のない暖炉のような有り様となった。

少女は涙を浮かべて倒れる。

危ない、とそれを慌てて抱き上げるナイトメアは一帯を見渡した。

そして、賑やかだった国の末路である荒れ地へと化した広野の真ん中で、傷だらけの少女を抱いた青年は道なき道を歩む。

腕のなかで眠るのは身体だけでなく精神まで傷を受けた、青年にとっては何よりも大切な子供。

そして、この世界にはいない『一異世界(エルヴィン)のエルフ』……――。

ナイトメアはこんなことになるまで、いくら事情があったにしろ助けに行くことのできなかった自分を恥じていた。

初めてこの世界に少女と落ちたとき、ようやく生きる活路が見いだせたとおもっていた。

しかしそれは大きく裏切られ、夢魔である青年とこの世界では異端のエルフである少女は研究に狂う人間達に見つかり、毛色の違うエルフだと知られた少女は捕獲され、研究員を妨害する夢魔のナイトメアは直ちに封印具に閉じ込められた

（魔物封印具さえあいつらが持っていなければ…！）

僕はもっと早く、あの地獄からこの子を連れて行けたのに。

研究所で様々な暴力的な実験を受けたエルフの精神に光はなく、今はただの殺人人形でしかない少女は、目を閉じて眠っているときだけが幸せそうに見えた。

（ここに近い町や村はないかな…）

少女の傷を診てもらわなければと青年の姿の夢魔は辺りを見渡す。

しかしそこには荒れ果てた土地と国を閉鎖し、取り囲むように自生している森だけしかなかった。

（森に、民家か何かないか…？）

青年は歩んでいた足を止めて、一度本来の姿に変えることに決めた。

ふわりと浮上される体はなんら変わらず人間に見えるが、よくみると足元が透けていた

破壊された都市の近くに町や村はなさそうで、森にも民家はない。

けれどもまた誰か別の国の研究員に捕まらないよう、身を隠す必要があると考えた仕方なくナイトメアは森に入る。

身を隠す為に入った森だったが、暫く進んだところに何故か自分の世界と同じ薬草が自生しているのを見つけた。

怪しげに植物を睨むように観察したあと、匂いや外見を判断して確証を得れば、

葉を口にして吐き出した物を少女の傷のある右肩に塗って、簡易の消毒を施す。

痛々しい生傷は目に染みるような赤々とした色をしていた。

（…ほかにもう出来ることはない。）

もし自分が夢魔でなく、人間ならば癒しの魔術をかける力があった

のだろう。

（僕は…なんて無力だ。）

ナイトメアは曇り出した空を見上げればひときわ大きな大樹の根の隙間に潜り込み、少女を抱きしめてまるくなるようにして目を閉じた。

夢魔に体温などない。…それでも、少女が寂しくないように彼はそうして寄り添っているのだった。

しばらくして、雨の降る音がし始めた。

＊＊＊

「センセー、あめだよお？」

「あら…さっきまで晴れてたのに…これじゃあ遠足は中止ね。皆、ノクターンに帰るわよ？」

まさかこの先にあった筈の国がなくなったとは露ほども知らず、た

だ大きな爆発音に危険を感じた女は雨を理由にそんな事を宣言した。
大きなボロボロの幌馬車が動きをやめ、えーという抗議の声をあげる子供達に微笑む。
「そのかわり、先生孤児院についたらおやつ作ってあげるからね！」
その言葉に機嫌をなおしたらしい。子供達は目を輝かせて『うん！』と答える。
女は幌馬車の御者台に座る男によろしくお願いしますと言うと、男は黙って頷き、二手に別れたうち右の大きなU字を描くような林小道を選んだ。

――――どれくらいたっただろう。

あっ、という少年の声に先生は振り向いた。
少年の名前はステイル。彼は赤ん坊の頃に旅人に孤児院の入り口に捨てられていた少年だった。
鴉の濡れ羽色をした少年の髪は短く乱雑に切られており、眼と同位色のヘアバンドを巻いている。
いつもはふざけるのが好きなステイルだったが、その時の声の様子は普段と違った。
「先生！先生！止めて！止めてったら！」

壁越しに叫ぶ子供の声に男は手綱を引いた。馬が嘶いたのちに急停止する。
幌馬車は大きく揺れ、中にいた子供達の悲鳴が聞こえた。

「どうしたの？ステイル」
「今！今、おれ妖精を見たんだ！」
「妖精？」
妖精というと魔物の悪戯妖精（アンシーリーコート）だろうか？
「駄目よステイル。それは魔物だから。」
「違うよ！あっ、待って！！」
ステイルが林の中に走り出した。女はあわてて男に子供達を預けると言ってから後を追いかける。
「ステイル！ステイル待ちなさい！！」

＊＊＊

ステイルは走って走って走りまくった。

（さっき、さっき見えたんだ…）

なんでだかわからないが、追いかけなくてはならない衝動に駆られ、ただひたすら走っていた疲労で、少年がゼイゼイと息を荒げて足を止めた時だった。

《誰だ。》

突然、青年の声が響く。
少年は顔を上げた。

「あのっあの、貴方はこの森の妖精ですか？」

我ながらおかしな質問をしていれと思ったが、それでもステイルは気になって問いかける。

しかし答えは返ってこなかった。代わりに相手から問いかけられたのだ。

《ここの近くに町や村はあるか？》

「え？すぐ近くにはトーセルハイデがあるけど…」

しかしその言葉は遮られた。
先生が自分の名前を呼んだからだ。
先生はステイルを見つけると安心した顔をしてから目を三角にしていた。

「ステイル！駄目でしょう皆を困らせたら！」
「待って、待って、先生！
あのね…妖精さん！トーセルハイデが一番ここに近いよ？」
ステイルは先生の手から逃れればそう言った。しかし、声の主は不機嫌そうに言った。
《あのろくでもない国に、サジュアを置いてなんかいけない。》
「サジュア？サジュアって何――――」
そこで少年はようやく樹の根の間にある大きな穴があるのに気づいた。ステイルはそこに近づいて顔を覗かせる。そして、あっ、と小さく声をあげた。
（――――黒い妖精がいる！あと赤い妖精も！！…って、怪我してる？！）
黒い妖精がこちらを睨んだが、その妖精が抱いている赤い妖精が苦しそうにするのを見れば、切羽詰まった声で青年は言った。
《お願いだ…サジュアを、助けてくれ…》
ステイルは妖精にお願いされるとは！と暫く驚いていたが、はっとして先生の方に振り替えって言った。
「先生！先生！お願い！赤い妖精を助けてあげて！！」

＊＊＊

幼い少女につけられた乱雑に切られた髪と身体の傷の痛々しさに、医師と先生は顔をしかめた。

なぜこんな酷いことができるの。と呟いたのは誰だっただろうか？

よく見れば少女の着ている、灰で薄汚れた服はトーセルハイデの実（モ）験台（ルモット）に着せられる囚人服で、

ステイルのいっていた『黒い妖精』がトーセルハイデに行くのを嫌がった理由がよくわかった。

「先生、先生、赤い妖精さんの怪我治るの？」

「あたし、治るまで待っててあげるんだ！」

「ずるいや僕も待つんだい！！」

樹の根から運び出した少女は、せまい馬車故に仕方なく生徒たちのいる蔵に保護者らしい『黒い妖精』に付かせて寝かせた。

最初は血や灰で汚れた少女と威圧感のある青年に生徒はびくびくとしていたが、

少女に怪我があるのを知った生徒達は警戒を解いて心優しく
『こうしたらいいよ』『ここならあんまり揺れないよ』、などと言って二人に場所を譲ってくれた。

黒い妖精は暫し此方を警戒して睨んでいたが、少しだけその力も弱まった気がした。

「……君達はどこから来た？」

医師は少女に包帯を巻きながら問うた。
保護者のように大切そうに少女を眺めていた青年の形を象ったそれは沈黙していた。

駄目か、と諦めのため息を医師がする前に、小さく答える声が聞こえた。

《ここではない世界。》
「つまり歪みから来たって事？」
《あれが歪みと云うならそうだろうね。》

その返答に医師はなるほどと頷いた。

「…トーセルハイデは異世界からの来訪者をよく思わない国だ。
だから、来訪者であるこの子を実験をしたんだろうな。

果たして自分たちの利益となるのか。」

と、先生が声をあげた。
「ああっ！よかった！目が覚めたのね！！」
「……。」
《サジュア！》
その言葉の通りぼんやりと目を明ける少女を見て青年は名を呼んだ。
よかったと笑う先生と医師は頷きあい…これで一件落着だ、と呟く。
しかし、少女の答えは残酷なモノだった。
「…お前…誰、だ…？」
サジュアと呼ばれた時。微かに懐かしさを感じたのか少女は青年を向いた。
しかし誰を指しているのかはわからないらしい。
少女は目の前で崩れるようにして―《嘘だよね？冗談だよね？》と自分に言う青年を見つめていた。
ここで嘘を言ってなんの利益が自分にあるんだ、と少女が呟いたあとに青年にもう一度問うた。

「…名前は？」

するとようやくそれを受け付けたらしい青年はうつむいたあとに何故か笑って答えた。

《…僕はナイトメア。君の…影だよ。》

＊＊＊

医師の診断結果、精神的ダメージによる記憶喪失とされた――ナイトメアという青年曰く名前はサジュアという――少女は帰る場所が無いために本来ならヴァルネシリアに渡すべきなのだろう。
だが体調なども考えて、ナイトメアと医師の話し合いの末、暫くノクターンの領地であるトーセルハイデと森を挟んで隣接する町の孤児院、ここセスルガの孤児院に身を置くことになった。

サジュアは囚人服を脱がされて現在は古くても清潔である白い服を着ている。
最初はその清潔さと白さに少女は着ようとしなかったが、ナイトメアの忠告を受けるとサジュアはしぶしぶそれに承諾した。

何ヵ月の時が過ぎただろうか。
冬の今でもサジュアもまだ孤児院になれていないのか、少女に興味をなくした他の生徒とは離れて過ごしていた。
いつもサジュアが一人樹に座って遠くを見つめていると、下から自分を呼ぶ声が聞こえた。

「…またお前か。」
「サジュア～一緒に遊ぼうって！一人じゃつまんないだろ？」
「お前みたいな煩いのは嫌いだ。」

ガーンとショックを受けた顔をするステイルの一方で、サジュアはその顔をみるのを楽しんでいるようだった。

「…ひでぇー…」
「ほら、早く仲間んとこ帰ったら？
私と居ても楽しくないぞ。」

しかしそんな昼間のサジュアではあったが、真夜中になると様子が一変していた。
それにステイルが気づいたのは、ある孤児院で小さなパーティーが行われた夜だった。
孤児院建設を祝っていつもよりも豪華な食事――それはただ、少しばかりお菓子があったり、肉があったりする本当に小さな幸せだっ

た――をよそった皿をもってステイルがサジュアを探していたときだった。

なぜこんな事をしているのかと言えば、煩いのが嫌いなサジュアはパーティーにいつも出ることはなく、寝室で本を読んでいた。ある日、ぽつんと残されるサジュアの皿がどうにも寂しそうで少年は運んで持っていくことにした。それがいつのまにかステイルの役目になっていたのだ。

「サジュアー？ご飯持ってきてあげ……」

寝室にいたのはあのいつも高貴そうなエルフではなかった。

「…もうやだよ…いつもいつも怖い夢を見るんだ…」
《大丈夫だよサジュア。だからもう泣かないで。》
「だって、だって、私は何もわからないんだ。ナイトメア。お前に教えてもらった名前以外、何も知らないんだ。忘れてしまったんだ――。」

ステイルは廊下で立ち聞きしたのを悪く思いつつ、一つわかった事があった。

サジュアは、煩いのが嫌いだからパーティーにでないのではない。

どうしたら、どう人と接したらわからないから誰とも話さないのだ。

少年は決心したように皿を持ち直すと、その部屋にとびこんだ。

「ね、サジュア！美味しいものが沢山あるんだ！君もおいでよ！！」

グスグスと泣いていたらしいサジュアはあわてて涙を拭って、ナイトメアの服を握りしめた。

「でも…」

「大丈夫だって！話したくないなら俺がサジュアの代わりに話すからさ！ほら行こう！」

「だが…」

戸惑いながらオロオロするサジュアにナイトメアは微笑んだ。

《大丈夫だよ、サジュア。》

その言葉に暫し保護者を見つめる少女だったが、間を置いてからこくりと首を縦に降った。

「……言っておくけど私は本当に何も話さないからな。」

「いいよ～？俺がんばるからさ！」

「……変なやつだな」

ぷす、と小さく笑う少女に、少年も笑った。

その夜が孤児院に来て初めてに笑顔を見せた瞬間だった。

＊＊＊

孤児院の平和が続く中で、ノクターンないしセスルガの裏では混沌が続いていた。

裏で密入や秘密取引をしていたトーセルハイデが突如消えてしまい、金の無駄遣いをしていたセスルガ領主がこれではノクターンに送る筈の税が足りないのに気づいたからだ。

（どうしたら…どうしたらいい？）

せっかく手にいれた地位を失うのが惜しい領主はあれこれと策を考えた。

領民に多額の税を搾り取るにもそんな事をすればすぐにばれてしまう。

ノクターンに今先程納税の期限を伸ばしてもらった帰り、馬車内ではだったがその伸ばされた3日間でどうやればバレずにすむのかと男は思案した。

と、突然耳障りな笑い声が聞こえた。自分を馬鹿にしているのかと顔をあげると、馬車が通っているのはちょうど孤児院だった。
痩せてはいるが、健康そうな赤みを帯びた顔をした少年少女が庭で走り回るのを見て、男はふと名案を思い付いた。

（孤児院なら…子がいなくなっても誰も気にするまい。）

屋敷についた頃には万全なる策を練りえたらしく、貪欲な瞳が光ると同時に、狡猾なる笑みを浮かべてその男は至急準備を急いぎ、その３０分後、領主の屋敷には馬車が二つほどやってきた。

馬車から降りた男に領主はお辞儀をする、

「…ああ、毎度お世話になっております…ええそうです。あそこの孤児院の子供、全て売って差し上げますよ。なぁに上玉ばかりですよ…ほら、見えたでしょう？

そのかわり、今すぐ金が欲しいのだが？」

山賊のような野蛮な男は、部下に木箱を運ばせる、中からは重々しいジャラジャラとした音が響いた。

「じゃあこれで交渉成立ですぜ、旦那。」
「ええ、ほら早く捕まえに行きなさい。私は今日何も見ていませんから。」

領主と男はお互いにクスクスと笑ってから、別れた。

第七部　「殺戮兵器は少女の名を持つ」（上）（後書き）

用事がはいってしまい、中・下編は０７／１６～１８に更新となります。
中途半端になってしまい、すみません

第七部　「殺戮兵器は少女の名を持つ」（中）

――これでよかったのかもしれない。

ナイトメアは一人残された部屋でサジュアの後ろ姿を一瞥し、ポツリとそう内心呟いた。

恐らくサジュアは知らないだろう。
サジュアの言う悪夢が事実である事を。
そしてその悪夢は、前世であるユエ・R・ウェルデンであったり、ルナ・マリア・クラウンの記憶である事実さえも。

しかし彼女はじきに気づいてしまうだろう。自分が神に呪われ、愛された存在である事に。

けれど今だけは、サジュアが笑っている今この瞬間だけは、どうしても壊したくなくて。

ナイトメアは虚空を見つめた。
瞼に浮かぶのは、かつて自分と対立関係でさえあった初代破壊の聖女（ルナ・マリア・クラウン）が消える間際の光景だった。

――――ナイトメア、私の影。今まで貴方を怖がってごめんなさい。

自分が消えると云うのに、彼女は自分の心配を一つもしなかった。
それは彼女が聖女だったからか、それとも彼女の元々の生まれが王族だったからなのか。今では誰も、サジュアでさえわからない事実

だ。しかし一つだけ、聖女の影の存在であるナイトメアが確信した事があった。

彼女は、聖女は自らの闇であるナイトメアを受け入れたのだ。

闇を受け入れるのは容易くない。人間誰もが自分の過ち全てを誰のせいにもせず受け入れることはほぼ不可能だからだ。

しかし彼女は受け入れた。

ナイトメアはその時、嘘だと思った。

そんな人間がいるわけないと思っていた。

死ぬ間際まで嘘をつくなんて、とあの時は本当で思っていた。

しかし、彼女は嘘を吐かなかった。

生まれ変わり、世界が新たな第二の聖戦を望んだ時。この世に生を受けたルナの生まれ変わりである少女はナイトメアに会ってこう言った。

――――なんだか貴方を知っている気がするの。なんでかな？ああそうだ、名前はナイトメアと言うのよ。

そして同時に、ユエはルナとは違った。

闇から生まれた完全な『光』の存在であるルナだったが、

ユエは半分『光』で半分は『闇』の属性を持っていた。

――――僕を受け入れたからだ。

ナイトメアはそれがわかってから、のちに第二の紅の聖女と呼ばれるユエから離れることはなかった。

――――そして、今。

紅の聖女はまるで月のように属性が変わっていった。

純真な光属性の満月（ルナ）、

ハザマに属する半月（ユエ）、

そして、闇に身を侵食された新月（サジュア）。

気のせいなのかもしれない。それならいい。しかし、それはナイトメアが生まれた自体、紅の聖女にとっての呪いなのだ。

《ああ、紅（マリア）の聖女……。》

君は僕を何故受け入れてくれたのですか。

＊＊＊

「……。」
「……。」

（びっくりだ。いやもうレベル越してるって。）

ステイルは素晴らしいくらいに横でなにも言わずに食事をするサジュアを見つめていた。その顔はいつもと同じ無表情で、先ほどの笑顔が嘘のように機械的だった。

彼女はけして肉が嫌いなわけではないが、それでも自分からそのおかずを取ることはなかった。しかしそのかわりに、余るほどあるグリーンサラダに手を伸ばし、先ほどがら黙々と消費していた。

（野菜そんなに好きなのかなぁ…）

ステイルも野菜が苦手なわけではない。だがどうせお腹一杯にするなら肉を選んで食べる。

と、サジュアが顔をあげる。紅の髪がさらりと顔にかかり、同色の眼が此方を向いた。その動きがまるで貴族のように優雅なので思わずステイルは息を呑んでしまった。

しかし彼女は訝しげな顔をして自分の顔をペタペタと触り、もう一度此方を向いて不審がるようにして言った。

「……なんかついてるのか？そんなに私を見ても何も楽しくないだろ？」

「あ、いや、あはは…」

もう一度サジュアは訝しげにステイルを睨んでから、今度は立ち上がった。

「あれ？どこ行くの？」

「外の空気を吸いに。ここは人が多すぎる。…ステイルも来るか？そりゃ、通訳だしな。」

「う…わかったよ」

自分はまだ食べたかったのだが仕方ない。ステイルはサジュアに渋々ついていく事にした。どこ行くのー？と行く先々で同じ質問をする友人達に、ステイルはサジュアの代わりに答えながらついていく。

二階についた。ナイトメアはいなかった。いつ降りたんだろ？ステイルは首をかしげる。しかしサジュアはそんな不思議現象には慣れっこらしく、そのまま窓越しに月を見ていた。

「なぁステイル。」

「何ー？」

そのエルフはぽそりと呟いた。
いや、問いかけた。

「私はここに居て、いいのだろうか。」

ステイルは最初どういう意味かわからなくてポカンと口を開けていたが、少し遅れて頷いた。

「そりゃそうだよ。だって君は僕の友達でしょ？」
「ともだち？」
「うん。仲間、味方だよ。」

少女は振り替えって此方をじっと見てから、再び月に目をやる。そうして沈黙が続いた。唐突にサジュアは呟いた。

「…仲間か。」
「うん。」
「君は、私が何であっても揺るがないのか？」
「うん。」

そして暫く彼女は考えてから再び問いた。

「…なぁ、ステイル」
「何？」
「私は探しているんだ、ある歌を。
ずっと、これだけが頭に残ってるんだ。
ナイトメアだって知らないのに、何故か私は知っているんだ」
「へぇ、どんな歌？」

聞かせて聞かせて！とステイルがはしゃげば、サジュアは暫く「嫌だ」「なんで私が」と軽く拒否したが、結局歌ってくれた。
優しくて、悲しいメロディーが響く。

♪…貴方の為に鎌を取る。
周りなんて関係ない。
私は生きるから。
貴方の死を刻む者を倒すために。
私は貴方の為に鎌を取る。

宝をなくした私は
宝箱を満たせない。
空虚な切ない宝箱

だから歌おうその日まで。
空に紫と紅がのぼるその日まで。
永久に生きるこの命。
永久に歌おうその愛を。

紫の月と紅の月だけがその二人を見守る中で、まるで神聖な儀式でもしたようにその小さな部屋は静まり返った。

「…ごめん、僕も知らないや」

「そうか。まぁいい。」

以外とすんなりサジュアは問いを引っ込めると、呟いた。

「…このまま、平穏が続けばいいのに」

「…君は…」

ステイルは手を伸ばした。届かない。わかってる。なのにそれがどうにももどかしかった。

少女はそれを見て吹き出した。変なやつ、と笑った。

錯覚なのだろうか、とステイルは膨れながら少女を見つめた。

（さっき、サジュアが泣いているように見えたんだけど。）

＊＊＊

闇の中で、それはゆっくりと歩みながら息を殺して待っていた。見れば見るほど舌なめずりがしたくなる。男はニヤリと笑った。

（あの領主も馬鹿だな。どうせ売るなら仕立てあげてからやりゃあ

今の倍の値にはなるのによ。
へヘッ…まぁ、俺達が得するだけならいいけどな！）

この孤児院は孤児院だと云うのに不潔さがあまりなく、服もそこそこ綺麗な物だった。
つまりはまぁ、売るには打ってつけな子供、いわゆる上玉な子供がそんじょそこらより多かった。

（ケケ…容姿に運が全部いっちまったんでねぇの？）

それから男は合図を送る。とたんに格子付きの幌馬車が孤児院の庭で月光の下はしゃぎまくる子供達に突っ込んでいった。

そして混乱、混沌が、パーティーで幸せだった平穏なる孤児院を犯し、悲鳴が響く夜に変わった。

最初の犠牲は医師だった。たまたま見に来たらしい男は危険を察知すると知らせようと叫ぼうした。しかし人売り男が部下に医師らしい男を殺すように命じるとナイフが一閃して、崩れるように医師だった人形は倒れる。活気づいた部下達はその勢いのまま5、6名が建物に入って行ったのが見えた。

「オラオラオルァ！死にたくなきゃ大人しく、このバウアー様に従いな！！
おいテメェら！女に手ェだすんじゃねぇぞ！商品価値が下がるからなァ！」

先生らしき女性が偉そうに棒を振り回しているのが見えた。部下はヒョヒョっと可笑しな笑いをしながら易々棒を受け止めるとそのままグイッと引き寄せた。

「女は黙って奴隷られてろっつぅの」

嫌がって暴れまわる女を強引に縄に縛ろうとする部下にバウアーは満足そうに目を細めた。

これならあともう１０分も経たずに終わるだろう。

（せっかくだから金目のもんでも取ってくか。）

戦利品に成りそうなモンがあるなら儲けもんだけどよォ、と大方捕まえる事のできた獲物を一瞥して、その男は下品に笑った。

笑っていた。

最初、綺麗な薔薇が見えた気がした。

部下に抱えられた薔薇は見事なモノで、男は最初『んなのは好きな女にやっておけ』と言おうとしたが、鼻孔を擽る臭いに口を真一文字に結んだ。

それは、薔薇ではなかった。

「っう…」

どう、と倒れた部下の背後から現れたのは小さな小さな子供だった。
まだ男の子供が居たらしい。それは初めて人を刺したらしく、手の中のナイフをカタカタと震えながら握りしめていた。

「よぉくも俺様の部下を殺したなぁ…？
オトシマエつけてもらおうか。」

統一者（バウアー）が立ち上がった。

＊＊＊

———やってしまった。

ステイルは物音がした気がして、サジュアを置いて二階から降りた。
目の前には仲間が縛られて泣きながら馬車に積まれている風景が広がっていた。

赦せない。カッとなったステイルは間近にあった七面鳥を切り分けていたナイフを掴んで、此方に気づいていないらしい背後を見せて

いる賊に刺した。

刺してから、気づいた。

自分が今、取り返しのつかないことをしてしまったという事実が後から波のように押し付けてくる。

「あ…あ…」

うまい具合に入ったのか、賊はぽたりと紙人形が倒れるようにして崩れ落ち、ステイルは震えながらナイフを持っていた。

緊張して頭がぐるぐるとする。誰かがオトシマエとか言っていたが、それに気が回るほど幼いステイルは冷静ではなく、ただ徐々に近づいてくる大柄な男に震えて、ただ佇んでいた。

「…あ…あ…」

目にいっぱいの涙が浮かんだ。

僕は死ぬんだと思った。

振り上げれた棍棒に目をつむった。

《ハッ！！》

短い声が聞こえた。男の呻く声がした。

目を開けると、そこにはさっきまでいなかった筈のナイトメアがいた。

「ナイト…」《サジュアは？サジュアは無事？》

どうやらサジュアの為だけに来たみたいだった。それでもステイルは嬉しくて、無事だよと笑って答えられた。

ナイトメアは振り上げられた棍棒ごと男の顔に踏みつけをしたらしく、大柄の男の顔に靴跡こそないが棍棒の跡がくっきりと浮かびあがっていた。

「お前ら、やっちまえ！！」

部下が一斉にナイトメアに襲い掛かった。夢魔はステイルを突き飛

ばすと何やら手を空中に広げた。青い光と共に彼にトライデントが何処からか現れて与えられると、彼は軽々とその囲まれた場所から飛んで上から一人を串刺しにした。

「ウゴァッ！」

「てんめぇェ嘗めやがって！」

《嘗めてはないよぉ、だって君達食べても美味しくなさそうだもの。》

今のうちだ、と弾き飛ばされたステイルは、なんとか先生達のいる馬車にこっそり忍び寄る事ができると普段は怒られるからしないのだが昔読んだ本から得た技術、解錠秘術（ピッキング）を小枝で成功させると、縄をナイフで切ってやった。

「みんな、逃げて！！」

わっとそれは蜘蛛の子散らすように仲間は馬車から飛び出していった。先生は避難させようとまだ小さい子供を抱いて走ったが、振り替えってステイルに微笑んだ。

「ありがとう、ステイ———」「先生危ない！！」

先生が振り返った。

後ろにはいつの間にかアイツの部下が迫っていて。

「死ねやこの糞女がぁぁぁあ！！」

絶叫した。

しかしそれはステイルの悲鳴や先生の悲鳴ではなく。

一面の赤を見つめる緋色を纏う少女。

《サジュア！！！》

一階に降りてきてしまったらしい、毛色の違うエルフだった。

第七部　「殺戮兵器は少女の名を持つ」（中）（後書き）

【０７／１０】２１：０８＜＜歌詞を変更。

第七部　「殺戮兵器は少女の名を持つ」（下）

悲鳴は物凄かった。先ほどの歌声はなんだったのかと言うほどに酷かった。

「あぁぁあああぁぁぁッ！！」

悲鳴。否、もう泣き叫んでいるようにしか見えないサジュアにナイトメアは慌てて目の前の男を串刺しにしてから駆け寄った。

《サジュア。大丈夫だよ、落ち着いてサジュ――――》

「嫌ああああああああッ！！」

とたん。サァァアッと何か足元で線が走った。ステイルは最初何かわからず、ただ避けた。先生も避けた。後ろにいた男は物凄い悲鳴に耳を押さえていた。正直こちらも押さえたかったがそんな余裕はなく、ただヨロヨロと避けるしかなかった。

それは魔方陣だった。大きな大きな、複雑な古代ルーン文字と何らかの意味を表す三角だったり、四角だったり、様々な記号が組み合わった巨大なサークルが広がっていた。

そして。

「なっなんだアレは！！」

男が指差したのは空だった。

遥か高い空から、なにかが落ちてくる。

それはグングン近づいてくる。だんだん大きくなって、ようやくそれが何かわかったとき、彼らは恐れおののいた。

それは、黒い巨大な『腕』だった。

どこから、だとか、誰の、だとかそんなのは頭に浮かばなかった。

『腕』は途中で幾重に分裂した。分裂した線もまた『腕』の形になっていった。

そうして、ようやく人間サイズに枝別れた『腕』は人売り賊達をたちまち捕獲した。

走り回るものや切りつけたり殴る男らも少なからずいたが、そいつらに攻撃は効かないのかするりとかわされて、再びたくさんの『腕』に分裂してそいつらをぐるぐる巻きにして連れ去った。

男達はそのまま空に昇るのかとステイルは思った。しかし腕はある一定の高さまで昇るとまるで玩具に飽きた赤子のようにポイッと男達を捨てていった。

とはいえそこは上空である。

重量に従って男達は落下し、そして――――――落としたトマト、もしくは卵のようになっていった。

サジュアはもう落ち着いている。というか眠っている。ナイトメアが額に手を当てて何やらぼんやりとした光が見えていることから催眠術か何かかけているのだろう。

医師である男を除いて、この孤児院が無事だったのはある意味奇跡だったのかもしれない。むしろ幸運といえた。

けれど、この一件があってからサジュアはますます無口になり、ステイルも黒い腕を呼び寄せただか召喚しただかはわからないが、ともかくそんなサジュアに近づける程、強かな少年ではなく。

事は一週間を過ぎてから起きた。

＊＊＊

「サジュアを、ですか？」

「ええ。先月の歪みで大多数の戦闘用員が消えてしまってね。ちょうど魔力を持つ少女がいるとお聞きしたので。」

「私は構いませんが…でも、いいんですか？あんな小さな女の子を

戦争にだなんて…」
「なに、そんなすぐに戦場に出しはしませんよ。」
ステイルは何事かと顔を覗かせる。どうやら先生は話し合いの最中らしい。相手は中年の逞しい男だった。
ここ最近、子供を引き取る人が増えていた。というのも、あの一件が街では大騒ぎになりノクターン自体が動いた結果、領主が全て先日の件の犯人だったことが明らかになり、今領主は新しい領主へと変わったからだ。新しい領主は領民に優しい人で、早くも受け入れられていた。
それはさておき、ステイルはサジュアが話題の内容になんとなく気になって扉に耳をくっつけた。
「いいんですよ。それに彼女、トーセルハイデの被害者だっていうじゃありませんか。」
「そうですけど…」
ステイルがもっとよく聞こうとした時だった。
「私に何か？」「うわっ」
後ろからサジュアがステイルを押して、話し合いをしている二人の部屋に入っていった。
「ちょ、何すんだよサジュア！」

しかしサジュアは答えない。

「私が何と？」

中年の男は笑って挨拶をしたあとに『トーセルハイデでは怖かったろうね。もう大丈夫。何をされたか、おじさんに話してくれるかな？』と言うのを聞いた。

しかしサジュアはスッと目を細めた。

何かが砕けた音がした。一同がそちらを見ると、花が生けてあった花瓶が割れており、床が水浸しだった。

「こらサジュア！」

「いやいや、今のは私が悪い。すまないね。お嬢ちゃん。」

不躾な質問をしたと笑って答える男と先生は花瓶の破片を拾っていた。サジュアはただそれを黙って睨み付けていたが、今の騒ぎでやってきたナイトメアを見るとその服の裾をぎゅっと握った。

《…サジュア？》

「私は…被害者じゃ、ない。」

「お嬢ちゃん、怖がらなくて――――」「私は！！」

俯いて、サジュアは言った。

「私は…加害者だ…あの日…トーセルハイデを壊したのは、私なんだ…

我慢できなかった、…何かはもうわからない。失ってしまった。
それでも、私は―――」

真剣に言うサジュアを他所に豪快に男が笑った。

「君ね、嘘はいけないよ。君は被害者だ。可哀想な女の子だ。
まぁ、なんせあのトーセルハイデだ。そういう風に思わせ――」

ブチブチブチッ…

少女は少し前より伸びて鎖骨まであった髪を手近にあったナイフでざっくばらんに切った。

ナイトメアは慌てて『サジュア！何して…！』と抱き寄せたが、遅かった。綺麗な髪は床に落ちて、赤いそれはまるで花弁のように散った。

「私は…私は被害者じゃない。
……可哀想な、女の子なんかじゃない。か弱い守られるような女の子なんかじゃない。
私は…俺は加害者だ。」

＊＊＊

サジュアはノクターンの正式な牢屋に移された。牢屋とは言っても、そこは城の一部でむしろ居心地がいいとも言える場所だったが、何しろ窓には鉄格子がついていたし、扉も自由に開けられるものではなかった。

なぜ突然そんな事になったのかと言えば、トーセルハイデは確かに魔術で消滅したという事だが、犯人がわからない状況だった彼らが、ただ安心したいが為にサジュアを塔に閉じ込めたかったからだ。

べつにトーセルハイデの為に犯人を探すわけではない。問題は、国家をごっそり消してしまえるほどの力を秘めた獣がいつ刃を自国に向けるかわからない。

だから、サジュアを野晒しにしては置けなかった。

国の正式な検査の結果、サジュアは常人では計り知れないくらいの魔力をもっているのがわかった。
なんせあのドラゴンの魔力さえ測れる魔力測定器が振り切った程だ。
魔術は相当な威力だろう。

かくして少女の証言は認められた

サジュアは私物を孤児院から持ってこいと兵士に言われて頷いたが、べつに彼女は何ももっていなかったし、行かなくてもよかったのだ。ただ、今は大人しく自分の影に潜む保護者が『挨拶をしなさい』と言うから仕方なく向かったのだ。

向かって、後悔した。

自分がいなくなった孤児院はなんだか生き生きとしているように見えた。あの一件があってから先生や仲間は自分をまるで爆弾のように恐れていたし、何よりあのステイルさえ避けていたわけだから相当嫌われていたんだろう。

何かチクチクとした感覚にサジュアは苛立った。同時に耳に取り付けられた本来ドラゴンにつけられるはず魔力抑制ピアスが仄かに光る。

《サジュア、ほら行かなきゃ》
「…嫌だ」
《サジュア、ここまで来れたでしょ？》
「…嫌だ」
《サジュア…》

だって。

（だって、私がいない方が世界はこんなに彼らに優しい。
私がする事全てが相手を傷つけてしまう。
なら…）

私はむしろ、いなくていいんじゃないか。
あの塔に閉じ込められたまま、死ぬまでひっそりと暮らせば世界は平和なのではないか。

（あの塔に、ずっとずっとずっと――――。）

「……サジュア？」

その声が聞こえたとき、サジュアは逃げ出そうと踵を返した。
ナイトメアが止める言葉が聞こえたが、そんなのはどうでもいい。
消えたい、そう、このまま一人で、ずっとずっとずっーと、そうして死ねばきっと世界は平和だ。トーセルハイデのように何かを大変な事をすることもなく、孤児院のように誰かを怖がらせる事もなく、ずっとずっと…

「……なん、で。」

なのにお前はどうして、私の腕を掴む。

「サジュア、悪い。お前に助けてもらったのにあんな態度で――。」

「うるさい」
ありがとうって言うべきだったよな。なのに、ずっと無視して…」
「うるさいぞステイル」
「サジュア、あのさ…」
「うるさいったら！！！」

ああ、また私は誰かを傷つける。

伸ばされたステイルの手をサジュアは払った。そして、今までにないほど長く、全ての鬱憤を晴らすように叫ぶ。こいつの前で泣くのは癪で、抑えるために声が震えた。

「何が悪いだ、何がありがとうだ。嘘。嘘ばっかり。遅いし、意味わかんないし。私は人殺しだぞ？この身体だって、いじくり回されて、薬がドバドバ入ってて、むしろ薬が血みたいなもので、気持ち悪い、殺戮兵器の私に何を謝る事があるんだ。私は――――。」

サジュアは視界が滲むのに気づくと目を擦り、涙がこぼれる前に拭ってなかった事にしようとした。

「――――私は、この世界の人間じゃないから。」

＊＊＊

サジュアの吐露するような暴言がステイルに突き刺さった。だか彼は自分が傷ついているとは感じなかった。むしろ、逆だった。

（何も、わかってなかった。）

誰より孤児院で一緒に居た、だから理解していたつもりだった。なのに自分は何一つ知っていなかったじゃないか。

「サジュ…」

「君は、そうやって笑っていればいいじゃないか。私、私がいなくても君は支障がないだろう。仲間がいっぱいいるんだし、私の代わり、というか私よりいい仲間は沢山いる…」

ちがう。ちがうよ。

君は君しかいないのに。

「サジュ…」

「お前らは笑ってろよ！！」

こういうとき、いつも出てきてくれたナイトメアが今日は出てきてはくれなかった。なんだよ、と思ったけれど自業自得というやつなのでステイルは泣いていないように見せているらしいが、きっちりばっちり涙が見える幼なじみに叫んだ。

「笑えないよ！！だってサジュアが笑ってないんだもの！」

少女はびっくりして口をつぐんだ。その間にステイルは振り払われた手を伸ばして肩を持った。ゆさゆさと揺らした。

「サジュアは一人しかいないじゃないか！！それに、それに君は一人ぼっちだ。ナイトメアがいるけど、でも友達は僕以外にいないじゃないか！

それで笑えって？無理だよ！だって、サジュアは」

サジュアは、

「僕の仲間だから…っ」

暫く、沈黙した空気が流れた。お互いが鼻をすする音と嗚咽だけが聞こえた。不意に、サジュアが言った。

「…馬鹿じゃないのか。私と友達になっても損しかしないのに。」

「どうせ僕は馬鹿だしのろまだよ。」

「いや、のろまとは今は言ってな…」「でもいいんだ。」

ステイルはにっこりと笑った。

「だって、僕が馬鹿なお陰でサジュアに会えたわけだしさ」

＊＊＊

サジュアはきちんと挨拶をしてからノクターンに帰っていった。閉め出された音がなんとも言えない気持ちにさせたが、今はそれでも全然気が楽だった。

先生や仲間はサジュアに気づくと皆謝った。それからこう言ってくれた。

「手紙、書くからね。」
「外に出たときにはここに帰ってこいよな。」
「そんでまたかけっこしようぜ。俺さ、まだお前に勝ったことないから」

“また、おいで”

「――――ねぇ、ナイトメア。」
《なぁに？サジュア。》

ふわりと青年が現れると、少女は心から笑った。

「今まで、私を守ってくれてありがとう。」

これからまだいっぱい世話になるけどさ。と付け足す少女を保護者はただ穏やかに抱き締めて。

《よかったね、サジュア。仲間が出来て。》

「――――そう、だね。うん。」

（私、今“幸せ”なのかもしれない。）

第八部　「月は夜明けの国を照らす」（上）

塔に入って半年が過ぎた。何だかんだですでに何もないこの空間に飽きていたらしい。狭い塔内にびっしりと並ぶ本棚がそれを物語っていた。

『少女』はこの数ヶ月の間に自分に限界を感じていた。
本に出てくる偉大な者は皆男性で、同時に時々戦力が足りなくて戦場に“釈放”される際にも、やはり、体格差で味方であろう兵士に邪険にされた。
弱いくせに、自分よりも弱いくせに、そう。勝てる物が魔力だけであっても。
時々優しい兵士が気にしなくていいと言ってくれたけれど、サジュアには慰めなど要らぬものだった。

『女の癖に』。そんなに男が強いのか？ああ、強い、そりゃあ身体の構造だって違う。だけど私には敵わない人間もいる。それでももっと強くならなくてはいけない。だから。

「私…俺は、」

“少女”は今しがた完成した薬を見つめて笑った。そう、もっと強く。身体の構造ですらコピーしてみせる。そう、これはきっと決められた事。

「……だから泣くなよナイトメア」
《だってぇぇぇ僕のサジュアがぁぁあ》
「お前ただの保護者だろーよ…」

保護者の反応は物凄かった。何が凄いって夢魔の癖に枕を涙でびっしょびしょにしてくれた。そもそも夢魔がそこまで人間に近い形に変化できるというのも凄いというものだ。というか、涙腺までコピーする必要があったのだろうか。お陰でベッドに寝られない。ちなみに何がショックなのか一応聞いたところ、『だってサジュア可愛いのに！五年後が楽しみな子なのに！』などと、なんだかとんでもない事を言い出したのでとりあえず殴っておくことにした。

それはともかく。

「効果が三時間なのがなぁ…もっと長く続かないもんかな…」

《むしろ性転換なんて効かなくていいよぉ…》

「はいはい」

下らない話をしている途中で扉からくぐもったノック音が響いた。サジュアは薬瓶を机に置くと、立ち上がりナイトメアに合図をする。すぐさま青年はぐすぐすしながら影の粒子に還ると姿を消し、それを確認してから少女は扉を開けた。

兵士が仏頂面で立っていた。その不細工さに思わず笑いそうになったが内心だけに留め、サジュアは見上げるようにして相手を見ながら何用かと問いかけた。すると、相手はサジュアに黒い蝋封のされてある手紙を差し出した。

「…これは？」

「陛下より御通達です。今夜開かれる舞踏会に出席するようにとの事。

なお、各国からも代表が集まり、トーセルハイデについてお聞きしたいとご命令であります。」

「承諾した。…と言いたいが、あいにく俺、否、私は舞踏会に着る

服がないのでね。」

そもそも人が密集する場所はあまり好きではないサジュアは、ドレスがない事を理由に断ろうとした。まさか囚人にドレスは貸さないだろう。

しかしその目論見は間違いだったらしい。兵士が一歩退くと、そこから何やらわらわらと女が入ってきた。

「な、に、うわッこら触るな！おい！どういう…」

しがみつくように三人の女はサジュアを取り巻いてなんだかよくわからない紐で縛り上げ、紐に印をつけるとすぐに解放した。

サジュアの戸惑い気味な声に兵士が鼻で笑った後、真面目な声色でその言葉に律儀にも答えてくれた。

「ドレスは陛下が用意するとの事だ。」

———数時間後。

どれくらいの人間が動いたのかは知らないし、知りたくもないが動くには全く適さない服が贈られてきた。

ナイトメア曰く『よくまぁ数時間でこんなのができたね』だそうで、やっぱりかなりの人が動いたみたいだ。

真っ黒で、黄色い線の成された服にレースやらなんやらの装飾がつけられている。手触りは今までにないほどによかった。

なんの素材だか最初はわからなかったが不意に、これは黒一角獣（アインスコーン）の素材だと呟いた。
暫くしてからなんで知っているのだろうと自分で自分に疑問をもった。もしかしたら記憶を失う前の自分は服屋だったのだろうか。

「いや、それはないか」

服屋なら魔術は知らないだろうと結論してから、ますます自分がわからなくなってしまい、ついには痺れを切らして現れたナイトメアが話しかけるまで一人悶々と考えていた。

＊＊＊

にっこりと微笑みながらそれは城の高い場所で見物していた。きっと彼女は知らないだろう、こうして自分が全て手配した事なんて。
少年は自分より小さいのにも関わらず、戦場で時々駆り出されては『鮮血の少女』だの『紅き死神』だのという異名を轟かせる、あの毛色の違う少女がどんな反応をするのかとても興味があった。

「ミラン様、本当によろしいので…？」
「父上にはもう言ってあるよ。それにきっと他国の王だってトーセルハイデ消滅について興味があるはずだ」

戸惑い気味な兵士に、方眼鏡を押し上げながら少年はにっこり笑ってみせる。

黒髪、そして見ようによっては青にも紫にも見えるこの少年――

――ミラン・ダラウス・ノクターンは自分の予定が思い通りになるのをとても楽しげに見守っていた。

眼下ではドレスをおっかなびっくりで受け取った少女が塔にまた戻っていた。

楽しみにしてるよ、とミランは呟いた。

「君は私を退屈させなさそうだからね。」

＊＊＊

案の定というかなんというか。サジュアはこの動きづらい服がなぜかしっくりくるという違和感をぬぐえないでいた。

そもそもドレスの着方をなぜ自分が知っているのか、やっぱり服屋だったのだろうか、記憶を失う前の自分は。でも今は服やデザイン

や流行なんてさっぱり興味もないし…。なんとなくだが服屋は違うという気もしていた。

（だとしても、だぁあ、もう。本当に歩きにくい！）

このイライラはきっとドレスのせいだ。そう、思い出せないからではない。動けないからだ。そういうことにしておこう。

つけ毛である夜会結びとやらや、それを隠すベール等も本当に邪魔だった。お陰で短剣ですら操れなさそうだ。

サジュアはため息しつつも会場だと言われた場所になんとかたどり着いた。既に人はたくさんおり、中には自分と同じくらいの年の女もいた。何が楽しいのか二人でペアになってクルクル回っている。

輪舞曲だ、と誰かが呟いた。護衛している兵士は真一文字に口を結んでいる。じゃあ誰が？俺が？まさか。

背後にぐいっと引っ張られる感覚がした。サジュアは考えていたからか気配に全く気づかなかった。そいつはなにかやたらごちゃごちゃした服を着ていて、花の香水らしいが明らかにつけすぎな気分の悪い匂いを振り撒いていた。

「お嬢さんはどこの家の子かな？よかったらお話しないかい？」

――――は？

サジュアはぽかんとして男を見つめた。齢はだいたい２０から２５位だろう。それでもだいぶ老け顔の男は何をいっているのだろうと暫し少女は目を瞬かせた。その間に何を勘違いしたのか、男はサジュアの手を取ると会場内ではなく外にいこうとした。

「あ、待っ…」
「ほら、早く行こうじゃないか」
「お…私はまだ一言も答えてない」
「沈黙は肯定なのさ、お嬢さん。」

成る程、と思わず納得してしまったがサジュアはその手を払うと睨み付けた。相手はまだふにゃふにゃとした気持ちの悪い笑みを溢して手を伸ばしている。なんだこいつ、やるしかないか…？
サジュアが隠し持っている短剣に手を伸ばした時、誰かがその手を取った。そしてぐいっと引っ張られると同時にその相手の黒髪が見えた。闇のような、けれどナイトメアとはちがう、そうこれはまさに夜空の色を移す髪色だった。

その人間は男に微笑をして答える。

「すみません、私の妹でね。どうかお引き取りください。」

爽やかだけれど、どこか有無を言わさぬ迫力に男はカクカクと頭を縦にふってからまたふらりとどこかに消えていった。
それを見送ってからサジュアはハッとする。回された手を離してもらおうとぐるりと円を描くように手を払った。

しかし相手は払った後にまた手を繋いでくる。そういえば礼を言ってなかった気がする。それでなのかとサジュアは面倒そうにため息をして相手を見上げた。

「ありがとうございました。…まだ何か用ですか？」

「うん。ちょっと、ね。」

方眼鏡の青年はそう答えてから首を傾げてみせる。キラリと方眼鏡の装飾チャームが光った気がした。

「僕が送ったドレスは気に入ってくれたかなって思って。」

「ええまぁ肌触りは、…って…はい？」

サジュアは目を瞬かせる。あの兵士はなんと言っていたっけ？そう、ドレスは…

「貴方がノクターン王？」

「の、皇子ってとこかな。ミラン・ダラウス・ノクターンだ。よろしく、『鮮血（マリア）の少女』。

君はすごく面白いよ。『鮮血（マリア）の少女』。見ていて飽きない。

だからそのお返しって事でさ。」

それがまるで当たり前のように言うのでサジュアはきょとんとしてしまったが、暫くして問いてみた。あの、会ったことありますか？

すると青年はさらりといいや？と首をふる。

「上から見てたんだ。」

――ナイトメア連れてこなくてよかった。

サジュアは内心呟いた。

第八部　「月は夜明けの国を照らす」（中）（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません！

第八部　「月は夜明けの国を照らす」（中）

ミラン・ダラウス・ノクターン。
サジュアもその名前を聞いたことがあった。

父親似で、色々な変わった物を集めるのが趣味らしく、国営の博物館にある品の殆どが彼の趣味で集めた代物という噂が立つほど、彼は収集家だと言われていた。

また、戦争（チェインウォーズ）ゲームというボードゲームが好きな母親に似たのか、たまに戦場に赴いては自国の軍師をも兼ねる程の頭脳の持ち主なのだという。

そんな異色な頭脳明晰の皇子ミランだったが、欠点があるとすれば自分の興味が湧いたものを側に置きたがる癖だろうか。

サジュアはミランが王の居る部屋へ案内するからと手を引かれるままに歩み、途中で問いかけた。

「お前…殿下は私のような怪物は怖くはないのですか？」

するとミランは笑って答える。

「私を仮に殺しても君に利益はないだろう？却って束縛が強くなるだけだ。
従って君は私に害など与えない。怖くなどないさ。」

――なんか、やりづらい奴。

内心ではそう思っていたが、ふふっと笑う自分より一回り背の高い人間に、サジュアはため息をするだけでその手を離すことなくついていった。

長い廊下だった。赤い布に金の糸が装飾された絨毯を踏みしめながら暫く歩くと、なんだかやたらと豪華な扉にたどり着いた。両脇には兵士が立っており、いかにもといった厳かな雰囲気が漂う。

兵士は困惑顔でミランを見つめた。

「殿下、その女は……」

「案ずることはないよアグール。彼女こそがゲストなんだから。」

「なんですって?!」

こんな小さな女が?!とアグールと呼ばれた男ではない方の兵士が目をぱちくりとさせた。

サジュアは女で悪かったな、と睨み付けながらミランの手を振り離す。

「私に用があると聞いて、参上いたしましたが何が問題でも?」

「あ…いえ…それにしてもこんな小さな女だとは…」

我慢の限界だった。

サジュアは腰のリボン装飾に隠してあったナイフを片手に構えると瞬時に兵士の喉元に刃を向けた。

「女だからと、舐めるな。」
「っ…！」
「…鮮血(マリア)の少女。もういいだろう？彼も懲りただろうし。おイタはよくない。」

凍りつく空間で、兵士はただ冷や汗をかいて少女を見下ろしていた。サジュアは暫くそうしてナイフを向けていたが、肩に置かれた手と声に渋々刃を退けた。

「…っ…」
「はは、大丈夫？
じゃあ、警護よろしくね。」

ミランは兵士をそう励ますと自分はさっさと部屋に入っていった。サジュアは暫く二人の兵士を睨んでいたが、そのうち興味が失せたのか目を離すと直ちにミランの後を追って部屋に入っていくと扉を閉める。

ずる…と兵士は壁に背をもたせてため息をした。

「ゲストがあの『鮮血の少女(マリア)』だなんて…
くっ…それにしてもなんて強さを持つ少女だ…」
「ああ、敵軍が可哀想な位だな…」

そしてノクターン城内の兵士や傭兵に暗黙の了解として、男尊女卑の思考や行動は禁止されるようになったのは、この事件が起きた後日、アグールが発案者なのだという。

＊＊＊

他国の王はまだこの部屋にいないようで、ミランに連れられた部屋でサジュアは紅茶を手にしながら、無駄に装飾がなされた部屋を眺めていた。

「パーティーはいかがかな？」

不意に扉が開く音と、ノクターン国王の声が聞こえてサジュアは立ち上がった。ミランが答える声がする。

靴音が響いて暫く、ノクターン国王は他国の王を連れてやって来るのが見えればサジュアは膝を軽く折って会釈し、挨拶をした。

「…お初にお目にかかります。この度はこのような行事に私ごときが参加のできるよう手配して下さった事、感謝いたします。」

「おお。そなたがかの有名な…しかし幼すぎではないか？」

眉を潜めるサジュアを見て小さく笑ってからミランはそっとフォローする。

「父上、エルフと我々ヒューマンでは育つ仮定も容姿も変わりますよ。」

「おお、そうであった。

…はて、我はお前の名前を訊いたかな？」
「…いえ。」
「ならば答えるがよい」
異名で呼ぶのを我はあまり好んではおらぬのだ。と豪快に笑うノクターン王を見つめてからサジュアは目を伏せた。
「…サジュア。サジュア・ウィル・ローリアと言います。」
「ふむ、サジュアか。
今宵はそなたの武勇伝を肴に杯を交わそうと我は思うのだが…どうかな？レアノール・ライズ・アルファ王？」
「私も興味がありますね。ミルド・ダウル・ノクターン王。
何せ消えたのは我々の隣国ですから。」
長い金髪を留めた綺麗な青色の瞳をもつ王はノクターン王――ミルドに微笑んだ。その眼差しは本当の兄弟に対するかのように優しい視線だった。
その後ろでクスリと笑う、どこからどうみても２０代前半の王女が茶々をいれた。
「あら、レアノール。貴方ただ血生臭い話が好きなだけじゃないの。」
「はは、なら君の国民と私は同等だな。今度遊びにでもいこうか、メイール・アンズ・モルフォス」
「それは楽しみ！久しぶりにパーティーでも我が国で開きましょう！」
盛り上がる三国とは相反して寡黙の青年はサジュアを目にやるとフッと笑った。

「…ノクターン王、本当にこの女なのか？」
「ああ。そうだぞ、シャオジエ王。」
「私を名で呼ぶな。
…ふん…成る程な…」
男は暫しサジュアを睨んでから口を緩ませた。
「…お前があんなに死体を生産したのか…」
「死体愛好家（シャオジエ）はちょっと黙ってて」
フリーダムすぎる王にサジュアは若干どころではない苛立ちを覚えたが、ミランがさりげないフォローを入れてくれるので、キレて暴れたりするという事はなかった。
「さて。」
暫くして、ミルドが咳払いをした。ようやく本題に入るようだ。
「遊戯はここまでにして、彼女の話を聞こうじゃないか。
我々が手を焼かせたあの国をたった一人で滅ぼした、この少女の武勇伝を。」
＊＊＊

サジュアは自分が覚えている事だけを伝えた。
最初こそあまり会話をしない質だった故にぎこちない口調だったが、時間が立つうちにスラスラと自分の記憶を告げることができるようになった。

目が覚めたのは孤児院で、それより前の記憶がないこと。
しかし断片的に国を滅ぼした記憶がある事。自分は沢山の実験台にされた事。
ついには破壊兵器として殺しを手掛けた事。
…そして、耐えられなかった何かに自分の中にある力が暴走した事。

「その力は魔力とは別なのか？」
「…わかりません。」

シャオジエ国王の質問にサジュアは素直に答えた。あれは魔術なのだろうか？召喚術ではないにしろなにか強い力なのは確かだった。
サジュアは答えられないことに礼儀上で小さく謝罪した。

「すみません。」
「まぁ、君は普通とは一変した存在だからね。
異世界にはそういう力をもつ人間もいるのかもしれないし？」
ミランのフォローに小さく笑ってからサジュアは全てを語り終えた後、国の話し合いになるからとミランに手を引かれて静かに退出し

た。

バルコニーは穏やかに風が吹いていた。踊るものの笑い声や音楽が小さく聞こえてきたが、それはけして雑音ではなくむしろ静けさを際立たせていた。

サジュアはつれられたバルコニーから月を眺めた。

＊＊＊

アルファローレにある2つの月は毎晩交互に空に光輝いていた。それが一年のうち七日間だけ同時に上がる夜がある。

2つの月を聖女ルナと親密であったヴィオに例えてその特別な七日間の事を人々は『聖なる晩日』と呼んでいた。

（そう…この日、月は二つだった。）

サジュアは静かに暗闇で身体を抱いた。
ミランがこの手を綺麗だと言ってくれた日。
血で汚れた罪だらけの自分を受け入れてくれた日。
それが彼のいわゆる『収集癖』だとしても、サジュアには充分だった。

「君を義妹にしたいんだけど、どうかな？」
「…好きにしたらいい。」

目の前の記憶の映像が流れていく。
サジュアはそっと目を閉じた。

さぁ、もっと、もっと記憶を掘り進めなければ。

手放した記憶の欠片を集めようとして、サジュアは暗闇の意識の中で手を伸ばした。

第八部　「月は夜明けの国を照らす」（中）（後書き）

（下）は八月中に更新します。
また、九章からは新章に突入いたします！

第八部　「月は夜明けの国を照らす」（下）

ナイトメアは机に置いてある砂時計をなんども上下を変えていた。
一人物思いに耽りながら、彼の視線はサジュアのいつも持つバスタードソードに向かっていた。

彼女がバスタードソードを握ったのはいつだっただろうか。
少なくともノクターンに来てからなのは明白だ。
しかし、ナイトメアは具体的にいつ彼女が剣を習得したのかはわからないでいた。

だから、ある時幼いサジュアが突然現れた小さな魔物を切った時はそれは驚いた。
その時に『いつ習ったのか』と聞いたことがあったが、彼女はきょとんとして言った。
曰く――『見た物の真似をしてるだけだ。』だという。

見た真似だけであれほど正確に剣を振るえる者は普通ではいない。
そして、それだけではなかった。

ああ、とナイトメアはその日を思い出して頭に手をあててため息をした。

本来両手で構える事で安定するバスタードソードだが、サジュアの剣の構え方はちがった。

むしろ、傾く重力の威力を生かして素早い振りへと転じさせるあの構えは。

「ルナ、君が死んでこんなにも経っているのに……」

鮮やかに蘇る、最初の聖女の姿。

ナイトメアの口元は笑っていた。

「あの子は、君にそっくりなんだ…。ルナ。
二番目だってあそこまで似てはいなかったのにサ…？」

ふと空虚な空間で、ポニーテールがふわりと優雅に舞う赤髪の少女が笑った気がした。

＊＊＊

サジュアは目の前のそれに呆然とした。
十歳以前の記憶を探し求め、より深い場所に足を進めた少女の前にあったのは
まるで禁忌を閉じ込めるかのように鎖でがんじがらめに封印された記憶の球体だった。
はは、とサジュアは浅く笑った。
――俺の過去は、一体どんな過去なんだ。
鎖はただの鎖ではないのを知っていたサジュアは指でそれをなぞりながら目を閉じた。
「……これ以上は精神崩落の引き金になりかねないというのか……？」
――これ程までに記憶を求めているのに。
ずるずると鎖に手をかけた手が球にそって滑り落ちた。
――ああ、もう。泣きたい気分だ。
“思い”と“意識”が反発しあう精神でサジュアはしゃがみこんだ。
自分に足りないモノが欲しくて手を伸ばすのはいけないことなのだ

ろうか。
それすら自分は赦されないのか。

知りたい。
時々脳裏を駆けるあの景色はなんなのか。
意味深な記憶の情景は一体誰なのか。
そしてこの無性に悲しくなる気持ちの理由を。

「…っ…くそ…」
「そんなに焦らなくてもいいんだよ――ファルシア」

突然だった。
自分の精神内には普通自分か同一の存在であるナイトメア、
もしくは術に精通したモノでなければ入れないのにも関わらず

「…！！…お前…ッ」
「言っただろう？記憶は君の中にあると。
…けして無くなったりしないと君も言ったはずだ。」

黒いローブがはためいた。
風もないのに銀色の髪が優しく揺らめく。
その髪の合間から覗くエルフらしい尖った耳。

そして何よりも惹かれる紫の瞳（アメジスト）――

「僕は君に嘘はつかないよ。『サジュア・ウィル・ブライト・ファルシア・ウル・マリア・ローリア』。」

――それは誰でもない、終焉（ファイナル）ノ箱だった。

「…ッ！？」

サジュアの中でぞくりと何かが駆け巡った。

＊＊＊＊

「……。」

終焉ノ箱はカプセルの中で眠るサジュアを見つめた。
精神の中に入るのはけして容易くはない。
けれど―魂が記憶し、慈愛をしているものならば話は別だった《・・・・・・・・・・・・・・・》

（――サジュア。）

今の彼女は昔の彼女にとてもよくにている。

「君が求めたのは無謀なモノだったけど…それでもよかったんだ。」

君はあの時笑っていたから。

――でも今の君は求めているのに、どこか苦しそうだ。

終焉ノ箱は暫くカプセルから手を離さなかった。

それから、一つの呟きの内にため息を秘めて言葉を吐いた。

『聖なる地のエルフ（ホーリーマルク エルヴィン）』

それから手を離し、立ち去ろうとした時だった。

《ねぇ》

振り替えると先ほどまでいなかったナイトメアが
そこでふわふわと浮遊しながら、腕を組み此方をにらんでいた。

いつもなら戦闘になる筈の状況、ましてや相手は敵であるにもかかわらず、
ナイトメアは視線を厳しくするだけで武器は持たなかった。

《危険を犯してまでここに来るほどの執着心があるナラバ、
なんで君はダーカルスにいる？》

夢魔の問いかけに終焉ノ箱は微笑んだ。

「…ダーカルスにいる人間は、邪神教の人間が６割を占めているからさ。」
《つまり？》

「僕は残り４割の人間――８年前にダーカルスに制圧され、やむを得ずダーカルスに職する同胞を助けたい。だから僕はダーカルスから逃げられない。」

終焉ノ箱の答えにナイトメアは暫し目を瞑ってから、言った。

《何故、サジュアに本性を明かさない？まぁ僕は明かさない方が嬉しいケドサ。君らしくないと思って？》

「……それは」

終焉ノ箱は苦しげに顔を歪ませた。ナイトメアはそれを平然と見下ろし、それから横を通りすぎればサジュアのいるカプセルを撫でた。

《まぁ君の勝手だからいいケド。》

「……。」

《ただし》

「？」

突然の殺気に終焉ノ箱は振り向いた。刹那、首元にトライデントが当てられる。

《サジュアを泣かせる奴は絶対に赦さない。――いくら君であろうとね。》

終焉ノ箱が両手を掲げて降参のポーズをしたのち、ナイトメアは武器を消した。

それから終焉ノ箱は去ろうと足を窓に掛ける。

「ああ、そうだ。」

《？》

「ナイトメア、この装置は壊した方がいい。

…崩壊になりかねないよ？」

赤い目と紫の目が交錯する。それから、夢魔は笑った。

《どうもご親切に。でも、それを決めるのは君じゃない。》

ナイトメアの答えに終焉ノ箱はははは、と笑ってから窓から飛び降りた。

跡形もなく、夜の闇に融けて消えた。

＊＊＊

サジュアは一人になった空間で落ちた剣を見つめながら、先ほど終

焉ノ箱に告げられた名前と意味について考えていた。

――あの時、悪寒がした後に剣を構えたサジュアを見ても青年は武器を構えずに微笑んだ。

「君は本当にそっくりだね」
「黙れ。お前に何がわかる。」
「何がって、何が？」
「それは…。」

いい澱む騎士を見つめながら終焉ノ箱は続けた。

「聖女の義務…とか？」
「っ？！」

サジュアは目の前にいる青年をはっと見つめた。

「なんでそれを…！」
「さぁ、当てずっぽうだけど。
…でもね、サジュア。いいかい？」

前世の記憶は前世のモノであって君のモノじゃない。
だから、過去の聖女の記憶にあまり、感傷する必要はない。

「そして同時に、君が義務を守らないといけない理由はない。」
「なにいってるんだお前。」

邪神ディルシャによる穢れた闇を封じる、
そして闇に染まりきった世界を新たに作り直す義務はなくてはならないものだ。

サジュアは終焉ノ箱を睨んだ。

「お前は世界が闇に包まれてもいいと？」
「君が死ぬくらいなら、いっそのこと闇に滅べばいい。
…それに。忘れているようだけど。」

いつの間にか至近距離にいたらしい。終焉ノ箱はサジュアの髪を一房手にして、唇を寄せた。

「…僕はダーカルスだ。」
「！」

終焉ノ箱の言葉にサジュアはバッと身を離す。

危なかった。何故あんなに近づくのを許したんだろう。

そして同時に彼の側で安心していた自分に気づくと嫌悪した。

「…ッこの…」
「そう怒らなくても。
…サジュア。正義ってなんだろうね？
目の前にいるものを助けるのが正義なら、きっと世の中に悪は少ないはずなのにね…」

自分のしていることが善ではないのかもしれないという指摘にサジュアは剣を振るった。

「…ッそれを、悪であるお前がいうのか！」

一切の迷いがない太刀筋が終焉ノ箱に迫る。

しかし、その剣は止まった。

「なっ…」
「……！」

サジュアは寸前になって止まる剣に自分で驚いた。
とたん、キィィインとしたあの頭痛が襲う。

「…っ痛…」
「サジュア…？」

頭痛が激しくなる。目眩がする。

（駄目だ、ここで倒れたら…やら、れ…）

最後の言葉を思う前にサジュアの目の前は真っ暗になった。
剣が落ちた音と、倒れる自分を支える感覚がした。

「…サジュア…ルナ…僕は…。」

消え行く意識の中で、どこか切ない男の声がした気がした。

＊＊＊

何故こんな事になってしまったのかと問えば
返ってくるのは『それが運命だから』という言葉だけで。
私は彼を愛している。そしてけして忘れないと約束した。
だけど、今、現在(いま)の私は――――。
普通なら、魂以外の事でサジュアに関わってはいけない決まりだ。
けれど
あの人が斬られると思ったとき、思わず身体に命令してしまった。
「駄目！殺さないで！！」
その結果、見事身体は彼女の命令に従った。
元は同じ魂であり、同じ存在なのだ。
無造作もないまま従った身体はサジュアの意に反して動きを止めた。
（私…なんてことを…）

けれど彼女は後悔していなかった。
そして同時にサジュアの記憶への干渉を始めた。

サジュアは知らなければならない。
何故なら彼女は世界の運命を担う聖女の生まれ変わりであり、
新たなる聖女であるからだ。

「サジュア…。」

私を許して。

あの人を好きな私を、どうか。

魂の深淵で、初代聖女――ルナは涙した。

＊＊＊

セレスはそろそろ時間かと、カプセルの眠りからサジュアを目覚めさせようと医務室に向かった。

しかしそこにいたのは既に目覚めたらしいサジュアの姿だった。

「…やぁ、いつもより随分早いね。
記憶は見つかった？」
「いいや？……でも。」

サジュアは静かに答えた。

――俺は『聖女』なんだなってはっきりと自覚した。

第八部　「月は夜明けの国を照らす」（下）（後書き）

次回から新章に突入です！！
新章の連載は１２／２０～になります！
乞う御期待ください！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5886t/

Maria † Sacred war

2011年11月17日09時13分発行